第５回大会
関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会
報告書

【期　日】　令和元年 12 月7日（土）・12 月8日（日）
【会　場】　茨城県三の丸庁舎（水戸生涯学習センター・茨城県立図書館）
【主　催】　茨城県教育委員会，茨城県生涯学習・社会教育研究会
【主　管】　関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会
【協　賛】　NPO 法人ひと・まちねっとわーく，NPO 法人インパクト
（公財）茨城県教育財団，NPO 法人日本スポーツ振興協会
（公財）日本教育公務員弘済会茨城支部
【後　援】　福島県教育委員会，栃木県教育委員会，群馬県教育委員会，埼玉県教育委員会
千葉県教育委員会，神奈川県教育委員会，国立青少年教育振興機構
茨城県社会教育委員連絡協議会，茨城県公民館連絡協議会
【協　力】　国立教育政策研究所，茨城大学社会連携センター，茨城県教育庁社会教育主事会

はじめに

関東近県生涯学習・社会教育実践交流会第５回大会は12月７・８日（土・日）の２日間にわたって開催されました。開催県である茨城県の事情（国体開催）もあり，過去の大会に比べて約３ヶ月程度遅くなった大会でした。また，従来の開催場所を茨城大学から旧県庁舎（水戸生涯学習センター，茨城県立図書館）に移動し，市民に「より身近」で実践可能な報告を中心にした大会運営となりました。

大会テーマである「Design to Next」は，市民生活環境が大きく変化していることが基底にあり，生涯学習・社会教育がこの変化に課題を据えるという宣明に近いものです。「私や私たち，そして世界や地球とともに難局に立ち向かう」ことの宣言と言えるものです。令和の時代を迎え，数多ある社会教育・生涯学習課題から，「学校と地域の未来」「学びの施設の活動」「持続可能な地域」「寄り添う心」の４項目に，16の実践報告を整理しました。次の日本，次の世代，次の暮らし方，そして次の世界と，どう切り結ぶのかという課題でした。

交流会には，457人（１日目301人　２日目156人）の参加者が集まり，学生・市民の参加も増加してきました。４つの分科会は，いずれも熱い思いと真剣な討論，優しい笑いに包まれ，時間を超えての深まりを途中で終わりにせざるを得ないほどの濃い内容だったと思います。実践報告は，茨城県４例，福島県２例，栃木県２例，群馬県１例，埼玉県２例，千葉県２例，東京都１例，神奈川県１例，国立施設１例となりました。これらの報告は２日目の全体会で４人の分科会担当から報告され，参加者全員で共有できたと思います。

２日目の全体会は，合田隆史氏（尚絅学院大学学長，日本生涯教育学会会長）による基調講演が行われ，社会教育の現代的課題を国連SDGs，科技庁「SOCIETY5.0」から解き起こし総合的に提案していただきました。特に社会教育施設の現況について，図書館活動・運営の能動的展開と公民館活動・運営の困難性を描き出して，一律に社会教育の危機があるわけではないとの指摘が印象的でした。クロージングも社会教育関係者に重要なテーマが「ONE TEAM」であることをまとめとして提起しました。

夜間に実施された情報交換会も盛況で，独立行政法人国立青少年教育振興機構の山本 裕一参事を始め，多くのあいさつの後，発表者を交えての楽しい語らい，名刺交換が続きました。

実行委員会には，茨城県生涯学習課をはじめ，福島県・群馬県・神奈川県からも参加してくれました。また，茨城大学，常磐大学，茨城キリスト教大学等の大学関係の協力や会全体を支えてくれた社会教育主事の力も大きなものでした。茨城県社会教育委員連絡協議会や茨城県社会福祉協議会，そして，茨城県の５つの生涯学習センター，３つの青少年教育施設の協力もありました。例示すれば，限りがないほどの多くの社会教育関係者の熱意と行動力に支えられました。これが，社会教育・生涯学習の底力だと思います。

歴史を語る人は，「今」が到達点です。しかし，歴史を創る人は「今」が出発点です。本大会に参加した人，本大会運営を支えた人は間違いなく「歴史を創る人」だと思います。今日は「昨日の結果」だけではありません。明日をどうデザインするのかという意味で，今日は「明日の結果」でもあると思います。その意志と方向性を確かめ合えた交流会でした。第６回関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会はもう始まっています。さあ，もうひと踏ん張りしてみましょうか。

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会
実行委員長　　菊池　龍三郎（茨城大学名誉教授）

第５回大会を終えて（実行委員から）

今大会でも一日目に 16 の事例発表がありました。すべての発表を聞きたいと思いながらなんとか選び，部屋を回られた方が多かったと思います。各部屋ではすばらしい活動について，思いのこもった発表を聞かせていただきましたが，今回も，質疑応答にとどまらず，参加者間でも意見交換を行い，理解を深め，共有するしくみがとられていました。この意見交換によって新しい出会いがあり，自分の活動へのヒントをもらったり，励ましを感じたりして，みなさん，実践の場に戻っていかれるのでしょう。大会全体としてさまざまな「対話」を大切にしているところに私は深く共鳴しています。

地域では，学校・行政・市民・民間，さまざまな人が連携し，協働で地域の活性化や新しい課題に対応していくことが求められています。大学もともに活動に携わり，学生たちを育てていきたいと考えています。今後も多様な方々と対話の機会がもてる大会が継続されるよう願っております。

茨城大学　社会連携センター長　西野　由希子

本研究交流会の実行委員の一員に入れていただいたのが昨年度になりますことから，今回の交流会は２度目の参加でした。前回から実行委員のみなさまの会を運営する実行力，段取り力，機動力等にただ感服するばかりで，私はと言えば本学学生とともに交流会当日を楽しむことしかできておりません。今年度もみなさまの尽力に感謝しながら，１日目の事例発表を楽しませていただきました。

出席した４団体の事例発表は，実際に社会活動を行っている私にとって得るものが多く，また力を与えてくださるものばかりでした。メディアに大きく取り上げられたり表彰されたりという形は取らずとも，地域のニーズに応え，じわじわとその影響力を広げ，共感する者たちの力をつけていく。いずれもそのような実践事例でした。改めて地域力とは何かを考える良い機会をいただいたと思っております。本当に素敵な会を作り上げてくださった実行委員のみなさま，お疲れ様でした。

茨城キリスト教大学　文学部児童教育学科　教授　中島　美那子

私事で恐縮ですが，2019 年春に常磐大学コミュニティ振興学部・人間科学部を退職し，青山学院大学コミュニティ人間科学部に勤めることとなりました。いずれも，コミュニティをつくる人を育てようとする学部で，本大会に学んでほしい学生が多数在籍しています。

茨城を離れてやはり感じるのは，茨城の社会教育関係者の結束の強さ，社会教育主事経験者をはじめとするキーパーソンの存在の大きさです。だからこそ本大会の開催が可能となり，今また次の開催に向けて動き出すのだと思います。そして同時に考えさせられるのは，本大会が茨城大会ではなく関東近県大会であることの意味です。本大会を「面白い」と言う人の輪が広がり，遠方からも足を運ぶ人が増え，社会教育の実践の意義がより多くの人に共有され，実践を支える制度的基盤の強化にもつながるよう，関東近県民・地域貢献を掲げる大学の一教員として，何が出来るのかを考えていきたいと思います。

青山学院大学　コミュニティ人間科学部　准教授　伊藤　真木子

今回は，福島県の実行委員として大会に関わらせていただき，新たな気づきや発見により今までとは違う世界を垣間見る思いでした。生涯学習で全国トップクラスの茨城県が主催である実行委員会では，生涯学習・社会教育のオールスターが集まり，運営面や研修内容など，熱心な協議がなされ大変勉強になりました。また，これまで福島県での講演会や職務等でお世話になった先生方もおられ，心強い限りでした。さらに，広報部では部員の方々の斬新な発想や人を引きつけるデザインのチラシ作成もすばらしく，茨城県のパワーの凄さを実感しました。

大会当日は，運営面や研修内容は勿論，情報交換会では各方面で活躍されている方とのネットワークも築くことができました。大会後は，なぜか爽やかな気分になり，新たな目標をデザインしようという意欲が湧きました。東北地方にも関東近県の新風を運んでいきたいです。

福島県教育庁県南教育事務所　総務社会教育課
主任社会教育主事(兼)指導主事　渡邉　康一

都道府県魅力度ランキング７年連続最下位の茨城県に，この関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会。ギャップ萌え。

関東近県生涯学習・社会教育実践交流会の事例発表は，どの事例も見たい！魅力的なものばかり。素晴らしき，茨城県。無情にも体は一つしかない。あちこちとまわりながら，事例に聞き入る。地元愛にあふれている会場の空気。心が揺さぶられる。

２日目の合田先生の基調講演にも心が躍る。「社会教育の底力を示す時が来た。」合田先生が最後に，「このような会を宮城県で開催したい。」とおっしゃっていた。多くの人の心を動かす，魅力的な大会であった。

昨年度末，委員依頼時に，本県の教育長は「若い職員は，中に閉じ込もっていないで，外に出て，世界を広げるために，勉強してきなさい。」と背中を押してくれた。

社会教育熱が高まるとともに，茨城県の魅力にすっかりとやられた２日間であった。

神奈川県教育委員会　教育局生涯学習部生涯学習課　社会教育グループ
主幹 兼 社会教育主事　瀧澤　和人

実行委員として本交流会に参加させていただき，改めて『社会教育の底力』（合田先生の基調講演の演題サブタイトルをあえて引用させていただいた）を実感した。私にとってこの『底力』とは，人と人とのつながりが起こす『インスピレーション』である。社会教育には，人を感化させたり，奮い立たせたりする力があると信じている。少なくとも私はその影響を受けた一人である。

今回，私は広報部に所属し，ＳＮＳによる速報記事作成に携わらせていただいた。大会運営全般においては，あまりお役に立てなかったと反省しているが，私自身にとって今後の糧となる貴重な経験であり，大いに感化させられた大会であった。それは事例発表者を含め当日参加された方々はもちろん，広報部長の長谷川幸介先生をはじめとする広報部の皆様，他県から実行委員として参加された福島県，神奈川県の方と交流を深めることができたからだ。このつながりは今後の私の財産になるであろう。

群馬県教育委員会事務局　生涯学習課　社会教育係
社会教育主事　知久　鉄平

＜目　次＞

大会テーマ及び日程　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

［基調講演］報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

1　事業の実施体制　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8

2　運営組織・活動内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9

3　大会参加者　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10

4　オープニング　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12

5　事例発表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13

6　発表者の方へ～メッセージカードより～　・・・・・・・・・・　31

7　情報交換会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　35

8　分科会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　36

9　クロージング　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　36

10　第５回大会を終えて ～主催者からメッセージ～　・・・・・　37

11　アンケートより　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　38

12　成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　43

13　当日速報　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　45

＜参考資料＞

- 協議カード・メッセージカード
- アンケート用紙
- 第５回大会チラシ
- 実行委員会名簿
- 歴代大会テーマ

大会テーマ及び日程

第５回大会テーマ

Design to Next

支え合う心と熱い想いで明日を創る

社会教育実践には，その一つひとつに物語があります。
—あなたも，その物語に入り込んでみませんか
—あなたも，あなたの物語を考えてみませんか
—あなたとみんなの『幸せ物語』を創ってみませんか

大会日程

第１日目　１２月７日（土）　会場：茨城県三の丸庁舎（水戸生涯学習センター講座室，共用会議室）

12:30　13:00　13:30　13:45　14:30　14:40　15:25　15:35　16:20　16:30　17:15　18:15　20:15

受付	オープニング	移動・休憩	事例発表①	移動・休憩	事例発表②	移動・休憩	事例発表③	移動・休憩	事例発表④	移動	情報交換会
３Ｆ 小講座 室前	３Ｆ 大講座室 (ﾒｲﾝ) 中講座室 (ｻﾃﾗｲﾄ)		３Ｆ 大講座室 中講座室 小講座室 共用Ａ		３Ｆ 大講座室 中講座室 小講座室 共用Ａ		３Ｆ 大講座室 中講座室 小講座室 共用Ａ		３Ｆ 大講座室 中講座室 小講座室 共用Ａ		会場： メロー (水戸駅 北口 南町店)

第２日目　１２月８日（日）　会場：茨城県立図書館「視聴覚ホール」

9:00　9:20　10:20　10:30　11:50　12:00

受付	分科会報告会	休憩	基調講演	クロージング
			＜講師＞ 尚絅学院大学学長 日本生涯教育学会会長 元文部科学省生涯学習政策局長 **合田　隆史　氏**	＜登壇者＞ 小沼　公道　氏 (茨城県水戸生涯学習センター所長) 佐藤　孝弘　氏 (茨城県立白浜少年自然の家所長))

[基調講演]報告

学びの輪を育て，
地域の明日をひらく
～社会教育の底力～

学びの輪を育て，
地域の明日をひらく
～社会教育の底力～

［講師］

尚絅学院大学学長，
日本生涯教育学会会長，元文部科学省生涯学習政策局長

合田　隆史　氏

分科会報告を聞いて，それぞれの地域で充実した活動がされているという感想を持った。

今日は，私たちがそれぞれの地域で取り組んでいる実践が今の時代の中でどのような立ち位置にあるのかということを考えたい。

今，なぜ再び社会教育なのか

社会教育に関して，ここ数年新しい動きが出てきている。

「今なぜ再び社会教育なのか」ということについて，どのような時代になっていて，社会教育・生涯学習行政がどのような立ち位置になっているのか見ていきたい。

日本の現状を見てみると，少子化，長寿化（幸齢化），一極集中などの人口動態が進んでいる。

また，外国人，障害者，性的マイノリティーなど多様化する社会になっている。

AI やロボット，ビッグデータ，ユビキタス，シンギュラリティ VUCA ワールド等の出現により，新たな時代を迎えてもいる。

一方で，特殊詐欺，児童虐待，無差別殺人，ヘイト・クライム等の社会問題，地球温暖化，想定外の災害の多発等，地球規模での環境変化が起きている。

時代は令和へと遷り，ローマ法王来日や，東京オリンピックの開催，桜を見る会などが時事問題として取り沙汰されている。

世界に目を向けると，内戦や難民，少数民

族，民主化，テロ，核軍備，経済摩擦，温暖化対策等の課題が山積する中，SDGs の考え方が出てきている。

今何が必要なのか。

地域の取組として，例えば東京都国立市では，障害者・健常者という枠組を超えた「共生」の拠点として，公民館を中核に据えた活動を推進している。

また，岡山県総社市では，町内会を基本単位とした自主防災活動により，被害を最小限に食い止めようとする取組を推進している。

高齢化率の高い宮城県大崎市では，「要介護状態になっても自宅で過ごしたい・介護したい」というニーズに応え，地域包括ケアシステムに取り組んでいる。

また，今後の取組として，愛知県北名古屋市では，学校との協働体制を「学校支援地域本部」から「地域学校協働本部」へと発展させ，より多くの地域住民が教育活動に関わる体制づくりを推進している。

防災，介護，教育，障害福祉，外国人労働者等，様々な分野・領域に渡り，かつてないほど，あらゆるシステムが「地域」を当然の前提，必要条件としていることがわかる。

しかし，地域は本当に大丈夫なのだろうか。地域の存続を前提とするシステム設計は持続可能なのだろうか。

日本の人口は 10 年連続減少する中，居住地が東京に偏る構図となり，少子化対策と一極集中の是正が求められる。

集落の小規模・高齢化が進むにつれ，集落での生活や生産活動，さらには，従来から行われてきたコミュニティの共同活動の継続が困難な状況が拡大してきている。

地方から大都市圏（特に東京）への人口移動が収束しないと仮定した場合，人口の「再生産力」を示す若年女性人口が 2040 年に 50%以上減少すると推計される市町村は，全体の 49.8%。そのうち人口が 1 万人を切り，消滅の可能性が高い市町村は全体の 29.1%と推定される。「地方消滅」という未来が待ち構えている。

将来を見据え，新たな「集落生活圏」を描いていくことを提案する。

例えば，コミュニティバス等により交通手段を確保すること，道の駅に直売所を併設すること，旧役場庁舎を公民館等に活用すること，小学校の空きスペースや廃校舎を福祉施設等に活用すること，撤退後のスーパーを集落コンビニ等に活用すること，等である。

社会教育－
地域の明日をひらく

このような中で，社会教育は新たな方向性を，つまり「開かれ，つながる社会教育の実現」が求められている。

社会教育・生涯学習行政が取り組むことは，①住民（社会的に孤立しがちな人々も含め）の主体的な参加のためのきっかけづくりや，②ネットワーク型行政（社会教育行政担当部局で完結させず，首長，NPO，大学，企業等と幅広く連携・協働）の実質化，③地域の学びと活動を活性化する人材（学びや活動と参加者をつなぎ，活動を活性化する多様な人材の活躍を後押し）の活躍等を通

じ，元気な地域づくりの推進である。

社会教育の歩んできた道のりを振り返ってみると，それぞれの時代の課題に立ち向かってきた歴史がある。

1960 年代までの戦前, 戦後, 高度成長期。そして，1970 年代以降の，知識基盤社会への移行, 生涯学習体系への移行, 日本における生涯学習政策の進展，その上で今何が起きているのか。

1970 年代以降を少し丁寧にさらってみると，P.ドラッカーは『断絶の時代：1968 年』で, 知識経済への移行とそれに伴う教育革命の必然を唱えた。

ユネスコ「教育開発国際委員会」では,『未来の学習』(いわゆる「フォール・レポート」: 1972 年）が，OECD では『リカレント教育－生涯学習のための戦略－：1973 年』が唱えられ, 知識基盤社会へと移行した。伴って学習の仕方も変化した。

その流れを受け，日本生涯教育学会設立(1980 年)，中央教育審議会答申「生涯教育について」(1981 年)，臨時教育審議会「生涯学習体系への移行」を柱とする諸提言(1984 年－87 年)，文部省生涯学習局設置(1988 年),「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律（生涯学習推進法)」(1990 年)制定等, 生涯学習体系へと移行した。

日本における生涯学習政策の進展を澤野(前日本生涯教育学会会長)は，2019（世界教育学会第 10 回記念大会「グローバル社会における生涯学習振興の課題：国際比較の視点から見た日本の事例に関する批判的検討」(2019.8 から)）で，1960 年代後半から 1980 年代半ばまでを「導入期(Introductory Phase)」, 1980 年代末から 90 年代半ばまでを「発展期(Launch)」, 90 年代半ばから 2011 年までを「実施期(Implementation)」，2011 年以降を「生涯学習の実現期(Realization)」と，４つの時期に分けて考えることを提案した。

ここ 10 年くらいの間に新しい動きが出てきている。都道府県・市町村教育委員会に置かれる社会教育主事が, 数・配置率とも減少している。また，公民館も館数，学級・講座数とも減少傾向にある。

要因としてコミュニティセンター等の施設としての転用, 市町村合併に伴う廃止・整理統合が考えられる。

一方で, 生涯学習センターや博物館, 図書館は増加傾向にある。地方教育費総額の推移からは，予算減少に歯止めがかかっていることが読み取れる。これらのことから, 何らかの構造的な変化が起きていると言える。

社会教育費は，2008 年頃には 1 兆 7000 億円程度まで減少したが, 最近の 10 年ほどは，1 兆 6000 億円前後とほぼ横ばいの状態である。

職員数は，2008 年以降は 53 万人前後で推移している。施設数は，2008 年以降は，約 9 万施設前後で，全体としては横ばいで推移している。

その中で，公民館と公民館職員，社会教育主事が減少している。受講者数を見ると，2008 年以降減少に転じるが，そのほとんどは公民館利用者の減少である。

つまり，この 10 年間は，一時期の財政難

を背景とする全体規模の縮小ではなく，何らかの構造的な変化が進行していると考えられる。

産業振興だけでなく，文化，芸術，スポーツを含む地域に根ざした住民主体の活動が重視されるようになった。

その結果として，図らずも地域レベルで，1990 年代に言われた「総合行政」が実現しつつあるのだろうか。

「新しい共生」を考えるとき，行政だけでは，複雑・高度化し多様化する住民のニーズに対応しきれない。

住民に課題解決への参画と，そのための，あるいはそれらを通じての知識習得や人間関係形成の場を提供すること自体が，新たな行政需要になっていく。

新しい社会教育行政の形を探ると，循環型の生涯学習社会への移行に向かっていくだろう。

明日－
二つの流れは交わるのか

一つは，前述の「知識社会」，いわゆる知識が中核の資源となり，知識労働者が中核の働き手となる社会は，1970 年前後から 2020～30 年頃までの間に移行する。

特徴として，①知識は資金より容易に移動する，境界のない社会である。②教育の普及により万人が生産手段を持つ，上方移動が自由な社会である。③しかし，万人が勝つわけではない。成功と失敗の並存する社会，高度に競争的な社会である。

つまり，イノベーションによる経済成長が重視されるようなことである。

そしてもう一つは，この先に訪れるのは，「Society5.0」と言われる社会である。

このような（グローバル化，ネットワーク化などの）様々な変化は，相互に関連し合い，加速しながら進展している。

知識や価値の創造プロセスは大きく変貌し，それにより，経済・社会の構造が日々大きく変化する「大変革時代」とも言うべき時代を迎えている。

ICT を最大限に活用し，サイバー空間とフィジカル空間（現実世界）とを融合させた取組により，人々に豊かさをもたらす「超スマート社会」を未来社会の姿として共有し，その実現に向けた一連の取組を更に深化させつつ「Society5.0」として強力に推進し，世界に先駆けて超スマート社会を実現していく。

「Society5.0 実現による日本最興～未来社会創造に向けた行動計画～」を 2017 年 2 月に（一社）日本経済団体連合会が示している。

更に SDGs の考え方が出されている。2015 年の国連サミットで，2030 年までの国際目標（SDGs（持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals））が採択され，持続可能な世界を実現するための 17 のゴールと 169 のターゲットが構成された。

これらは，発展途上国のみならず先進国自身が取り組む「普遍性」，地球上の誰一人として取り残さない（leave no one behind）という「包摂性」，全てのステークホルダーが役割を持つ「参画性」，社会・経済・環境に総合的に取り組むことを必要とする「統合性」等の特色を有する。

例えば【目標 1】には「あらゆる場所であ

らゆる形態の貧困に終止符を打つ」と示されている。

生涯学習の理念の新しい動きとして，ユネスコ・教育国際委員会『学習：秘められた宝』(いわゆる「ドロール・レポート」(1972年)) の生涯学習の概念を引き継ぎつつ，学習の目的について「learn to know」,「learn to do」,「 learn to be」とともに,「learn to live together」を 4 つ目の柱として取り上げている。

つまり, 学習を, 個人あるいは経済活動の増進に焦点を当てて考える傾向に変化してきている。

二つの流れは交わるのだろうか。

新しい可能性－新「学問ノススメ」

社会の変化に対応した今後の教育行政の在り方について考えるとき，私たちに何ができるのだろうか。

生涯学習審議会答申(平成 10 年 9 月)では，ネットワーク型行政の必要性を唱えている。

「生涯学習社会においては，人々の学習活動・社会教育活動を,社会教育行政のみならず，様々な立場から総合的に支援していく仕組み (ネットワーク型行政) を構築する必要がある」と示した。

社会教育行政は生涯学習振興行政の中核として，学校教育や首長部局と連携して推進する必要がある。

また，生涯学習施設間や広域市町村間の連携等にも努めなければならない。

中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」(平成 20 年 2 月)では，施策を推進する際の留意点として, 連携・ネットワークを構築して施策を推進する視点を次のように示している。

「特に，様々な教育課題や行政課題がある中で, 地域住民のニーズを踏まえ, 限られた財政的・人的資源を活用しながら多様な施策を講じていくためには，地域における個別の行政目的や機能を持つ仕組みを有機的に連携させ，行財政面での資源の有効活用を図ることのみならず，連携による新たな相乗効果を生み出すこと等を積極的に行う視点が必要である」。

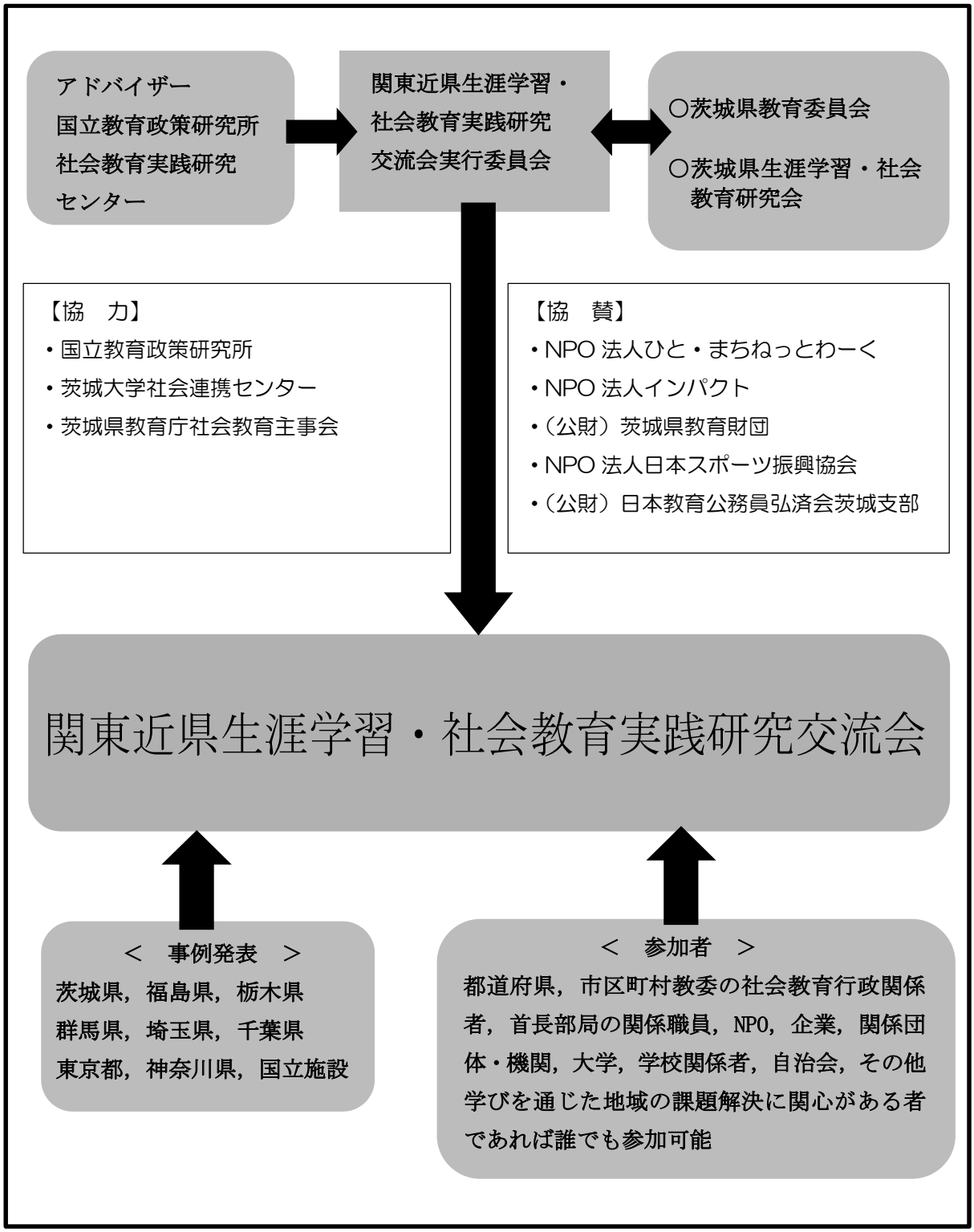
連携のためのネットワークを効果的に構築するためには，このような調整をより発展させ，具体的な活動を触発するコーディネーターとしての役割を行政の専門的職員等が果たすことが大いに期待される。

人生 100 年時代の今，私たちにできることを, 新「学問ノススメ」として 5 つ提案しよう。①ネットワークづくり, ②ポートフォリオ，パスポート，プラットフォームの累積・活用, ③学び直し，そして，④日本生涯教育学会プラットフォームや e 辞典の活用による学び。そして関心があれば, ⑤日本生涯教育学会プラットフォームに入って共に学ぼう。

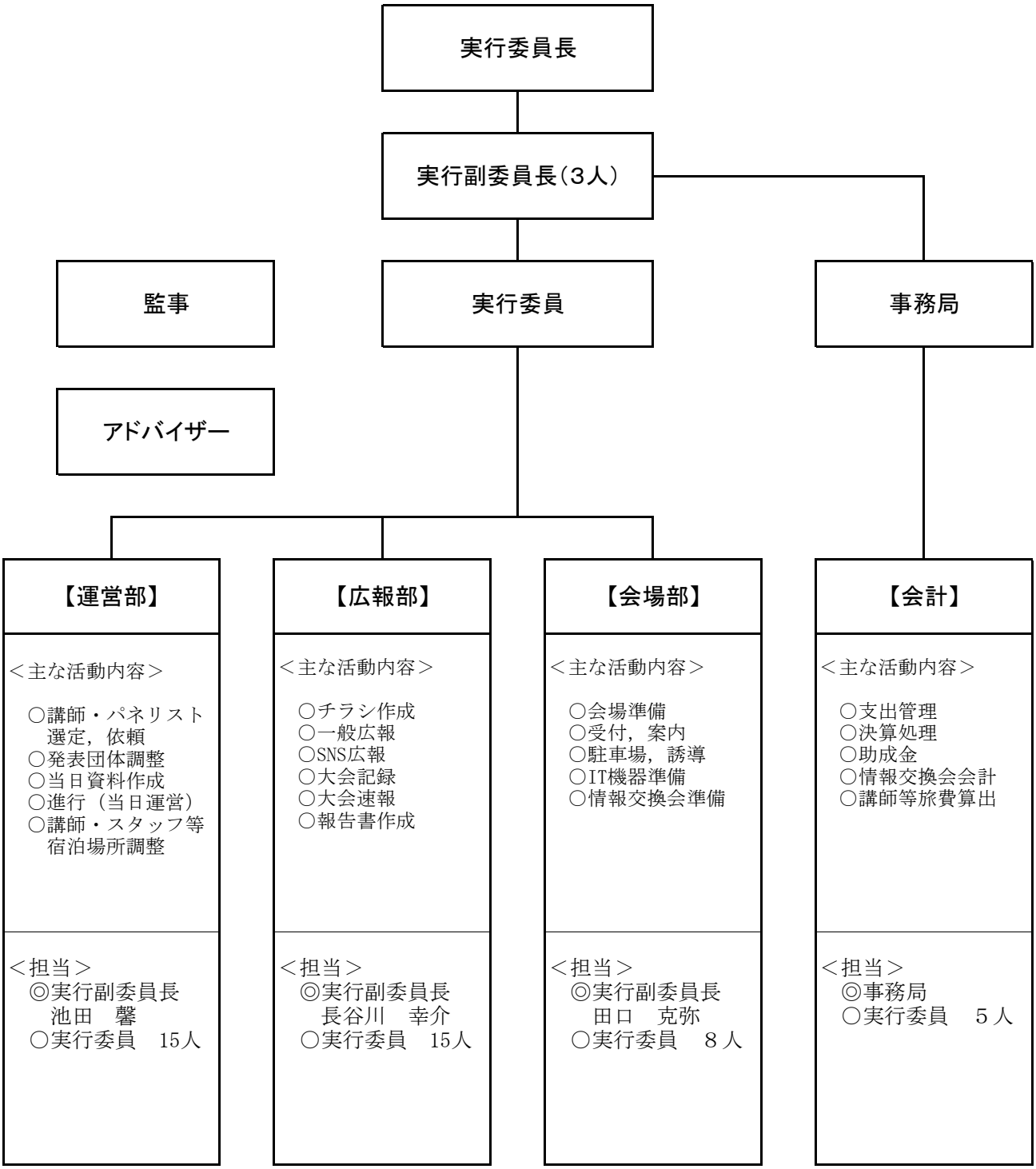
今, それぞれの地域で, 持続可能な元気な地域づくりが求められている。

それを支えるのが社会教育行政であり，社会教育主事の底力である。

1　事業の実施体制


アドバイザー
国立教育政策研究所
社会教育実践研究
センター
関東近県生涯学習・
社会教育実践研究
交流会実行委員会
○茨城県教育委員会
○茨城県生涯学習・社会
教育研究会
【協　力】
・国立教育政策研究所
・茨城大学社会連携センター
・茨城県教育庁社会教育主事会
【協　賛】
・NPO 法人ひと・まちねっとわーく
・NPO 法人インパクト
・（公財）茨城県教育財団
・NPO 法人日本スポーツ振興協会
・（公財）日本教育公務員弘済会茨城支部
関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会
＜　事例発表　＞
茨城県，福島県，栃木県
群馬県，埼玉県，千葉県
東京都，神奈川県，国立施設
＜　参加者　＞
都道府県，市区町村教委の社会教育行政関係者，首長部局の関係職員，NPO，企業，関係団体・機関，大学，学校関係者，自治会，その他学びを通じた地域の課題解決に関心がある者であれば誰でも参加可能

２　運営組織・活動内容


実行委員長
実行副委員長（3人）
監事
実行委員
事務局
アドバイザー
【運営部】
＜主な活動内容＞
○講師・パネリスト選定，依頼
○発表団体調整
○当日資料作成
○進行（当日運営）
○講師・スタッフ等宿泊場所調整
＜担当＞
◎実行副委員長
池田　馨
○実行委員　15人
【広報部】
＜主な活動内容＞
○チラシ作成
○一般広報
○SNS広報
○大会記録
○大会速報
○報告書作成
＜担当＞
◎実行副委員長
長谷川　幸介
○実行委員　15人
【会場部】
＜主な活動内容＞
○会場準備
○受付，案内
○駐車場，誘導
○IT機器準備
○情報交換会準備
＜担当＞
◎実行副委員長
田口　克弥
○実行委員　８人
【会計】
＜主な活動内容＞
○支出管理
○決算処理
○助成金
○情報交換会会計
○講師等旅費算出
＜担当＞
◎事務局
○実行委員　５人

３　大会参加者

■参加者数一覧［都道府県別（延べ人数）］

（単位：人）

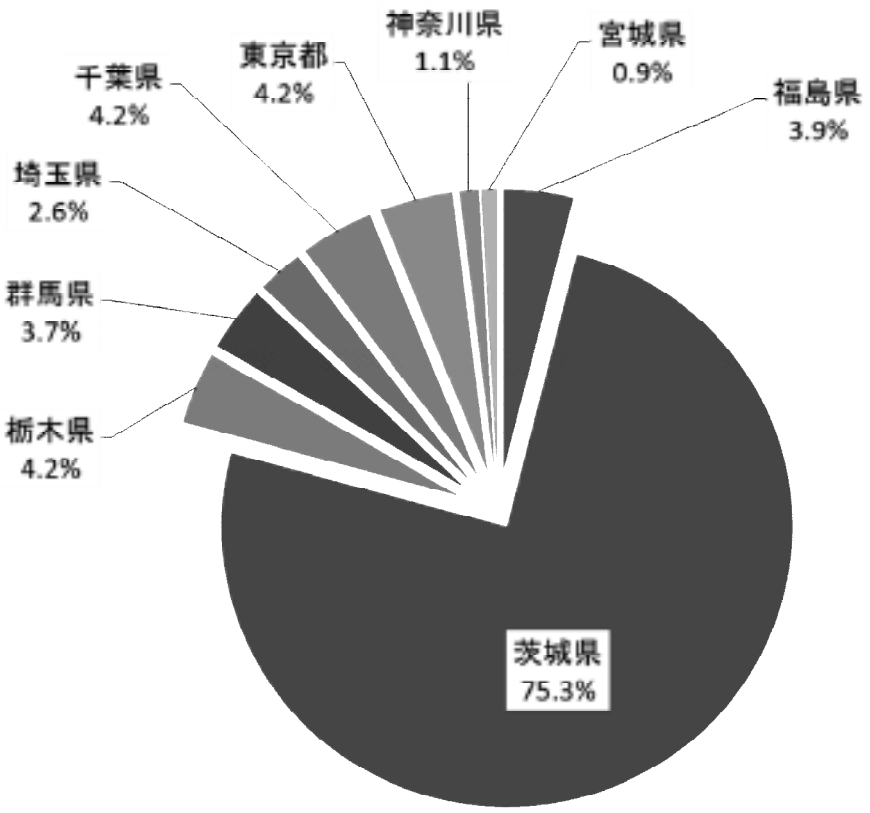
都 県 名	1日目 ［12/7(土)］	2日目 ［12/8(日)］	合　　計
福 島 県	16	2	18
茨 城 県	214	130	344
栃 木 県	15	4	19
群 馬 県	13	4	17
埼 玉 県	8	4	12
千 葉 県	14	5	19
東 京 都	15	4	19
神奈川県	3	2	5
宮 城 県	3	1	4
合　　計	301	156	457

９

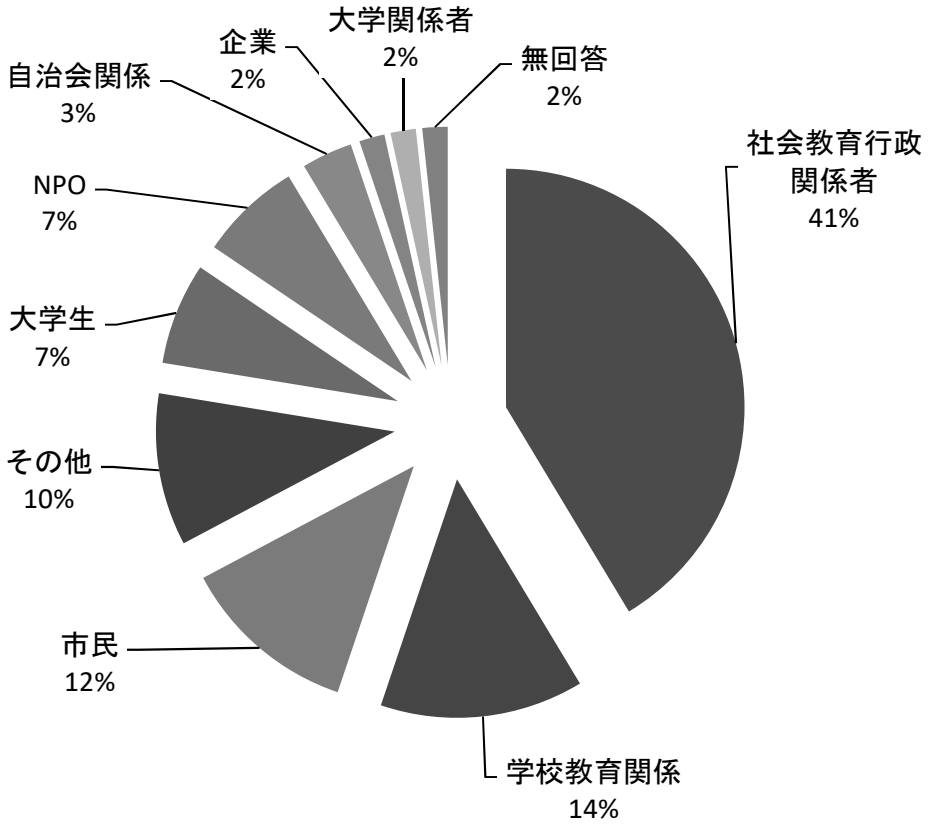
【参考】

	1日目	2日目	合　　計
第１回大会	314	168	482
第２回大会	331	184	515
第３回大会	334	203	537
第４回大会	450	186	636

■都道府県別参加者（延べ人数）



■所属別参加者（延べ人数）



４　オープニング　　1日目　12月7日（土）13：00～

■主催者

【実行委員会委員長
茨城大学名誉教授　菊池　龍三郎】

【茨城県教育委員会教育長　柴原　宏一】

■来賓

【国立教育政策研究所
社会教育実践研究センター長　上田　浩士　様】

【全体風景】

5　事例発表

発表団体一覧

≪学校と地域の未来をデザインする≫

時	発表テーマ		発表者
13:45～ 14:30	A　地域と連携・協働した教育の推進 ～「学校地域WIN－WINプロジェクト」 「学校と地域の未来を創ろう！プロジェクト」 の取組～	埼玉	埼玉県教育局市町村支援部 生涯学習推進課 地域教育幹　　上松　寿明
14:40～ 15:25	B　学校と地域のパートナーシップ体制の構築 ～複合施設を核とした学校・地域住民等の 連携・協働の取組～	東京	小平市学校支援コーディネーター ネットワーク会長　　布　昭子
15:35～ 16:20	C　地域と学校をつなぐ「良い」加減（いいかげん）な コーディネートとは？ ～ふくだ子どもの学び支援本部の実践～	千葉	野田市地域教育コーディネーター 野田市立福田中学校　川崎　貴志
16:30～ 17:15	D　川口市における「地域学校協働活動」の推進	埼玉	埼玉県川口市教育局生涯学習部 生涯学習課 社会教育主事　　市川　重彦

≪学びの施設の活動をデザインする≫

時	発表テーマ		発表者
13:45～ 14:30	E　学校・地域・行政の連携した取り組み ～足利市学校図書館（小中高8校）の Before・After～	茨城	学校図書館よくし隊　勝山　万里子
14:40～ 15:25	F　有秋散策地図　文化財マップをつくろう ～中高校生と公民館の連携の取組～	千葉	市原市立有秋公民館 社会教育指導員　　松本　明子
15:35～ 16:20	G　とちぎ子どもの未来創造大学（6年目）の取組 ～大学・企業等との連携をとおして～	栃木	栃木県教育委員会事務局 生涯学習課　生涯学習振興担当 社会教育主事　　黒尾　貴英
16:30～ 17:15	H　セルフディスカバリーキャンプ2019 ～青少年教育施設を活用した ネット依存対策推進事業～	国立施設	国立赤城青少年交流の家 主任企画指導専門職　梁河　昌彦

発表団体一覧

≪持続可能な地域をデザインする≫

時	発表テーマ		発表者
13:45 ～ 14:30	I　鉾田シティプロモーション事業 ～学校・首都圏大学生・市民・行政と連携した まちづくり～	茨城	鉾田第二高等学校　総合学科 メディア・マーケティング系列 第2年次
14:40～ 15:25	J　みなかみ町社会教育委員の活動 ～生涯学習フェスティバルへの取り組み～	群馬	みなかみ町社会教育委員 副委員長　鈴木　春美
15:35～ 16:20	K　これからの多世代連携，持続性のある地域運営	神奈川	横内子どもサポートネットワーク 協議会 鈴木　奏到
16:30～ 17:15	L「地域のつながる基盤を活かした連携・協働による 安全で安心できる地域づくり」 ～健康長寿・地域防災・子供の居場所～	福島	福島市吉井田学習センター 館　長　矢吹　稔

≪寄り添う心をデザインする≫

時	発表テーマ		発表者
13:45～ 14:30	M　被災地で大学生が現地の方々と協力しながら 試みる地域文化の復興 ～被災地支援活動の持続性を目指して～	茨城	筑波大学「コトノハチーム」メンバー 筑波大学生
14:40～ 15:25	N「じっくり聞いてしっかりつなげる」家庭教育 ～家庭教育相談室「こころのオアシス」の取組～	福島	西会津町家庭教育 コーディネーター(兼)教育相談員 紫藤　真理子
15:35～ 16:20	O　外国人支援の取組について ～学校や地域等における多様な支援～	茨城	茨城NPOセンター・コモンズ 横田　能洋
16:30～ 17:15	P　地域課題解決型学習の展開 ～さくら市家庭教育支援チームの取組～	栃木	栃木県さくら市 家庭教育支援チーム

１日目　１２月７日（土）　①１３：４５～１４：３０　会場（分科会Ⅲ：共用会議室Ａ）

Ａ　地域と連携・協働した教育の推進
～「学校地域ＷＩＮ－ＷＩＮプロジェクト」「学校と地域の未来を創ろう！プロジェクト」の取組～

学校と地域が連携・協働して実践している事業の概要等を紹介する。

・学校地域ＷＩＮ－ＷＩＮプロジェクト
　企業やＮＰＯ等の地域の力を活用し学校の学びを充実するとともに，県立学校の力を地域で生かす取組を推進する。

・学校と地域の未来を創ろう！プロジェクト
　小川高校及び小川町の小中学校の児童生徒が，発達段階に応じ，地域の文化や産業等を学び，地域課題解決に取り組む「おがわ学」を構築し，総合的な探究の時間等教育課程内で実施する。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習推進課　地域教育幹　上松　寿明

【活動の工夫】

・教育活動の中に地域資源を活用している。
・28 か所の企業等から 39 の教育プログラムの提供を受けている。（令和元年 10 月末現在）
・学校外の資源と学校とのマッチングを推進するため，学校側の要望を企業側に伝え，実施可能な企画を検討したり，ＨＰ等に活用できる教育プログラムをアップしたり，学校側が利用しやすい環境づくりに取り組んでいる。
・フォーラムを開催し，実践研究校の取組やマッチング事例の普及を図っている。

【活動の成果(○)と課題(□)】

○学校外の資源を活用することで，学校だけでは経験できないことに取り組むことができ，守るべき法令，配慮すべき社会情勢など，実社会から多くの学びを得ることができる。
○これらの取組により，地域の良さや課題を知るとともに，多様な人々との関わりを通して，主体性や思考力，自己肯定感を得ることができる。
□持続可能な取組として，各学校において，人事異動等で担当者が変わっても活動を継続していける体制づくりが必要である。

【協　議】

（参考になった点）
・学校側の要望に応える企画を検討し，ＨＰ等に活用できる教育プログラムをアップしておくことで学校側が必要に応じて利用できるように取り組んでいるところが素晴らしい。
・島根県と連携し，先進的な取組の情報を活用することで，よりよい地域活用ができている。

（課題の解決方法）
・地域と学校とのつながりが今後も継続できるように，担当職員が継続して足を運ぶなど，サポートに努めていく必要がある。

（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）
●今後は，学校と地域が連携・協働している姿をできるだけ多くの人に知ってもらえるように，学校と地域が連携した取組の広報活動をさらに充実していき，本プロジェクトや企画の趣旨を地域に周知できるよう取り組んでいきたい。

１日目　１２月７日（土）　②１４：４０～１５：２５　会場（分科会Ⅰ：大講座室）

B　学校と地域のパートナーシップ体制の構築
～複合施設を核とした学校・地域住民等の連携・協働の取組～

公民館と図書館の複合施設である「なかまちテラス」が開館をしたことをきっかけとして，中学校区の学校支援コーディネーターと地域住民等が協働するためのネットワーク「リンクス　未来クラブ」が活動を開始。「なかまちテラス」の企画・運営や，コミュニティカレンダーの作成等を行う中で，図書館の10代の利用者を増やすことを目的とした「ティーンズ委員会」を設置。近隣の小中高校生が話し合い，独自企画を実施することから始まり，第２期となる今年度は，中高大学生の12名が参加。「大賞」の選考も順調に進んでいる。さらに，近隣高校の放送部が大会に出品する作品のために「ティーンズ委員」へ取材に訪れる等，このティーンズ委員会の活動に，地域の10代の関心が高まって，読書活動の広がりにつながっている。

小平市学校支援コーディネーターネットワーク会長　布　昭子

【活動の工夫】

- なかまちテラスだよりやコミュティカレンダーを作成し，積極的に地域に情報発信している。
- コーディネーターと学校の情報共有を行い，参加対象のニーズと連携した講座や事業を実施している。
- 企業や大学等と連携することにより，学んだことを体験できるなど，内容が充実した講座が展開されている。
- 10代の若者を中心とした実行委員会を設置し，若者の視点が活かせるような取組をしている。

【活動の成果(○)と課題(□)】

○ティーンズ委員会で「大賞」を選考し結果を広報したことにより推進及び若者の図書館利用者の増加につながった。

○ティーンズ委員会の活動を通して，若者の地域社会への参画意識の向上を図り，自己有用感を高めることができた。また，市内に活動が広がりを見せている。

□今後，ティーンズ委員会の活動をどのように継続，発展させていくのか。

【協　議】

（参考になった点）
- 子どもの声を企画に生かすため10代で組織する実行委員会を設置し，活動していること。
- 学校と連携し，意図的に小・中学校の講座や教職員研修を「なかまちテラス」で実施していること。
- 施設設計の段階から，図書館と生涯学習スペースが自由に交流できる複合施設にしたのがよい。

（課題の解決方法）
- 「ティーンズ委員会」の趣旨を理解し協働できるメンバーの育成と必要な経費の確保は，必要不可欠。

（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）

○参加者や若者の視点で講座を企画することや若者の社会参画の機会を取り入れていきたい。

●学校や地域，企業と上手く連携するには，どの場面，どのタイミングで行うのか，どんな目的で行うのか，ねらいを持って計画的に，何回も話し合うことが大切である。

１日目　１２月７日（土）　③１５：３５～１６：２０　会場（分科会Ⅲ：共用会議室Ａ）

Ｃ　地域と学校をつなぐ「良い」加減（いいかげん）なコーディネートとは？
～ふくだ子どもの学び支援本部の実践～

野田市における学校支援地域本部の全中学校区配置（公立小中学校を全校カバー）への流れとコーディネーターの活動内容や立ち位置について，福田中学校での実践事例や川崎個人が心がけていること。

野田市地域教育コーディネーター野田市立福田中学校　川崎　貴志

【活動の工夫】

・コーディネーターのネットワークの幅広さ
（地域の人，女性会，大学，企業，NPO 等）
・学校の教育活動であることと学校のニーズをベースにしながら活動している。
・教職員の異動によって活動が停滞しないように新任の教職員に前年度の活動を DVD にまとめ渡している。
・生徒の委員会活動（図書委員）と連携して活動。
・支援の必要のある生徒を学校から事前に把握。
・地域人材を活用したキャリア教育。

【活動の成果(○)と課題(□)】

○積極的な地域人材の活用により，子供の多様な社会経験を積ませることができている。
○教職員の異動によって活動が停滞しない。
○学校が地域に頼みにくい，言いにくいこともコーディネーターをはさむことで，スムーズかつ円滑な連携ができている。
□講師等を学校に派遣する場合に内容が児童生徒には難易度が高すぎてしまったり，時間をオーバーしてしまったりすることがある。

【協　議】

（参考になった点）
・コーディネーターのアンテナが高い。ゆるやかな幅広いネットワークを築けている。
・敷居の低い図書ボランティア（昼休みの図書室の開放）で人を集め，他のボランティア（家庭科や美術の実技事業等）に生かしている。
・生徒と地域ボランティアの連携の在り方。
（図書委員との連携・・・校内掲示物，ビブリオバトル，新着図書の展示会等）
・渡り廊下を学校と地域をつなぐギャラリーとして開放。
（生徒の作品や道徳授業の資料展示，地域の人の作品など）
・わくわく理科授業・・・県立高校教諭，企業，東京理科大学，地域人材等の活用。
・わくわく授業（国語，英語，家庭科）・・・女性会，読み聞かせボランティア，地域人材等の活用。
・小６，中１，中２でのキャリア教育・・・企業，地域人材等の活用。
（課題の解決方法）…参加者から自分の知識や経験により出された助言。
・学校のニーズの聞き取り，講師との事前打合せを入念に行う。
・特別授業が行われる前に，廊下に演題に関連する掲示物を作成，掲示することで，子どもたちの興味・関心を高める。
（まとめ）…今後どのような活動に取り組んでみたいと思いましたか。（○参加者　●発表者）
○コーディネーターの養成・・・学校のために汗を流せる人材。
研修等にも参加することで，ネットワークを広げる。
●継続的な取組・・・教職員の異動やコーディネーターの交代で活動が停滞しないように意識。

１日目　１２月７日（土）　④１６：３０～１７：１５　　会場（分科会Ⅰ：大会議室）

Ｄ　川口市における「地域学校協働活動」の推進

市内の小・中学校における「地域学校協働活動」の現状や課題を踏まえ，教育委員会内における推進体制の構築や，「支援」から「連携・協働」への意識改革を図る社会教育側からのアプローチなど，「地域学校協働活動」の推進に資する社会教育主事としての取組について紹介する。

また，学校運営協議会との連携体制の構築や，埼玉県内の全小・中学校に設置されている「学校応援団」との関係性について協議を深める。

埼玉県川口市教育局生涯学習部生涯学習課　社会教育主事　市川　重彦

【活動の工夫】

- 「学校応援団」で地域の方々による学校教育への支援活動に取り組む。
- 「地域貢献活動」で生徒が地域の貢献活動に参加している。
- 「学校応援団」と「地域貢献活動」とで地域と学校との協働活動を双方向的に促進している。
- 放課後子供教室の中に月１回クラブ活動の時間を設けて，公民館地区文化祭などで子供たちの成果を発表する場を設ける。
- 地域学校協働活動に関わる部局間での意見交換をする。

【活動の成果(○)と課題(□)】

○放課後子供教室の横の連携ができはじめ，体験活動の多様化が図れるようになった。

○「学校応援団」と「地域貢献活動」との活動で，生徒が地域の方々に触れあう機会が多くなることで，コミュニケーション能力や自己有用感の向上につながる。

○学校地域間だけでなく，自治会やPTAなどの地域間の連携強化も図れている。

□より推進を図るため，担当部局の変更や学校のさらなる意識改革が必要になると思われる。

【協　議】

（参考になった点）

- 放課後子供教室の活動時間に学校で専用の部屋があることや体育館，図工室を解放してもらえることで多くの体験活動に子どもたちが参加できることが素晴らしい。
- 夏休み中の学校プールでの「着衣水泳」や校庭での「カレー作り体験」において，地域の「消防」に講師をお願いすることで，体験の幅が広がるような工夫が可能である。
- 放課後子供教室の体験活動の中で，月１回クラブ活動の時間に「将棋」「ダンス」「陶芸」「工作」などの活動をするだけでなく，地域の文化祭での成果発表につなげることができる。
- 「地域から学校へ」，「学校から地域へ」という双方向性の活動があることで，より地域と学校との連携が図れることや，子どもたちの自己有用感につなげることができるようになることが分かった。

（課題の解決方法）

- 「地域学校協働活動」を推進するには，多くの地域の方々の理解とPTAや自治会などの団体の協力が不可欠であり，また，生徒の成長への有益性について，教員への理解を図ることが大切になる。そのための，校長会や部局間での共通理解は必須になると思う。

（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）

○「地域貢献活動」を自分の地域でも，ぜひ取組として取り入れていきたい。

●川口市全体として，さらに多くの学校や地域で地域学校協働活動を推進させていきたい。

●川口市では学校を支援する「学校応援団」事業を学校教育部指導課が担当しているが，今後，地域学校協働活動の推進に向けて，生涯学習課に事業を移管し，活動の充実を図っていきたい。

１日目　１２月７日（土）　①１３：４５～１４：３０　　会場（分科会Ⅱ：中講座室）

Ｅ　学校・地域・行政の連携した取組
～足利市学校図書館(小中高８校)の Before・After～

平成 23 年から３年間，栃木県教育研修センターにおいて学校図書館研修講座を担当した事がきっかけで，足利市小中高の学校図書館改造を行っている。

活動内容の基本は，生涯学習課によるボランティア研修，各小学校での教職員研修を実施した後，実際に書架や書籍を移動し，見やすい表示を作成し掲示するというものである。特徴は，ボランティア研修において，学校図書館の基本理念を押さえた研修を行ったことである。単に飾り付けや掃除の活動ではなく，学校図書館の機能を活用するという視点での研修をしたことで，授業で活用することができるようになった。児童が短期間で主体的に資料を探すことができるようになったと共に，教員もポイントを押さえた指示ができるようになったと報告されている。

行政，地域，学校が連携することよって「主体的で対話的で深い学び」を支える学校図書館づくりのはじめの一歩を踏み出せた事例を紹介する。

学校図書館よくし隊　　勝山　万里子

【活動の工夫】

- 学校と生涯学習課の連携を要請（「学校図書館よくし隊」の発足）し，スムーズに流れている。
- 生涯学習課によるボランティア研修と各小学校の教職員研修を実施している。
- 授業で活用できるように図書館の環境整備を進めている。
- 図書館のルールとして，NDC（日本十進分類法）を取り入れた。
- 生徒によるブックトークを実施した。

【活動の成果(○)と課題(□)】

○NDCを取り入れ，図書館の環境を整備したことで，必要な資料を見つけることができるようになった。
○ブックトークの実施により，生徒が語彙や言語力を身に付けることができた。
○足利市では，平成 30 年から学校図書館担当職員を２名配置するようになった。（行政・地域・学校の連携）

【協　議】

（参考になった点）
・「探すこと」をシステム化することの必要性を感じた。
・学校図書館の運営の仕方については，新しい学校図書館のガイドラインを基に考えていく必要がある。
（課題の解決方法）
・ボランティアコーディネーターの制度を広く普及させることで，授業を行う先生方の手助けができ，子供たちの読書環境の向上を図ることができる。
・環境不備により生徒の能力を低下させてしまうことがある。
（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）
○自治体でボランティアとして取り組んでいきたい。
●学校図書館を使っての探求学習（デジタル能力）の必要性。
●色々な人を巻き込みながら，できることから少しずつ取り組んでいきたい。はじめは大変だが，まず，一歩前へ進まなければならない。

１日目　１２月7日（土）　②１４：４０～１５：２５　　会場（分科会Ⅳ：小会議室）

Ｆ　有秋散策地図　文化財マップをつくろう
～中高生と公民館の連携の取組～

主催事業としての取組　講座の様子（第１回～第６回）
１　市原市立有秋公民館の紹介　２　「有秋の文化財マップを作ろう」が主催事業となったきっかけ
３　講座の概要　～映像１「有秋の文化財マップを作ろう」全編　４　アプローチ　５　講座の経過
６　成果発表　～映像２「有秋散歩地図発表会」から生徒の感想，講師の講評
７　成果・課題　８　協力者紹介

市原市立有秋公民館　社会教育指導員　松本　明子

【活動の工夫】

- 地域の中高生が中心となって活動している。
- 公民館が核となり，学校教育（中高生）と市社協（鎌倉街道を歩く会）との連携を推進した。
- 事前学習をしてから実地調査（フィールドワーク）を行うことで，道標の変化に気づくなど，生徒の文化財や鎌倉街道への興味関心を高めている。
- パワーポイント等で中高生が成果発表を行い，大学の先生から褒めていただくなど，意欲向上につながっている。

【活動の成果(○)と課題(□)】

○「文化財への関心」や「気づき」を生徒たちにもたせることができた。
○「生徒たちの文化財に関する活動」を市民に知ってもらう機会となった。
○市の関係者に興味をもってもらえた。
□活動の成果をどのように知らせるとよいか。
□活動の成果をどのような形で還元するか。
□今後，学校や市とどのように連携していくとよいか。

【協　議】

（参考になった点）
- 公民館長から参加者への感謝状を贈ったことが，意欲向上につながっていた。
- 中高生がパワーポイントで成果発表をすることは，生徒の表現力の向上につながるとともに，達成感も感じることができる取り組みである。
- 中高生とこの取り組みを進めたことで，多くの方に知っていただくことができた。
- この取り組みで文化財への興味を高めた生徒の一人が，歩く会の先生がいる大学に進学している。

（課題の解決方法）
- 活動の成果物として作成された A3 サイズ３２枚分の歴史文化財マップを，公民館の中にとどめておいては多くの方に広まらない。この成果を効率よく伝えるために「イラストマップを作る会」を企画し，文化財マップをイラスト化する等，多くの人に活用してもらえるような工夫をしてみたらどうか。

（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）
●今後は，市原市の文化財を世界中の人に知ってもらいたい。そのために，SNS 等も活用した広報活動に取り組み，今回作成したマップをできる限り多くの方に知ってもらいたい。

１日目　１２月7日（土）　③１５：３５～１６：２０　会場（分科会Ⅰ：大講座室）

Ｇ　とちぎ子どもの未来創造大学（６年目）の取組
～大学・企業等との連携をとおして～

「とちぎ子どもの未来創造大学推進事業」について，事業の目的，概要，参加機関との連携状況を紹介する。また，スタートアップ講座や各講座の内容に触れるとともに，中学生を対象とした「とちぎ未来大使『夢』講座」について紹介する。

さらに，これまでの参加者や実施機関から寄せられたアンケート等をもとに，事業の成果と課題について説明する。

栃木県教育育委員会事務局生涯学習課生涯学習振興担当　社会教育主事　黒尾　貴英

【活動の工夫】

- 72 カ所の高等教育機関・民間企業・国，県関係機関と連携し，講座を実施している。
- 「本物」体験講座を数多く実施している。
- 学びのパスポートに単位シールを貼ることで，受講者が自分自身で単位管理できるようにしている。
- 「本物」体験講座以外に特別体験学習があり，４単位以上を取得した者のみ応募できるシステムを設定している。さらに，年間２０単位以上取得者を対象に表彰を行っている。これらが参加者の意欲付けに繋がっている。

【活動の成果(○)と課題(□)】

＜高等教育機関・民間企業＞
○より広い範囲（県域）で募集をかける事ができるようになった。
○受講者（子どもたち）にプログラム内容をわかりやすく伝えるための検討を行った結果，社員（職員）のスキルアップに繋がった。
＜行政＞
○学校以外の学びの場の提供に繋がった。
□講座の内容が毎年同じようなものになりがちで，マンネリ化している。

【協　議】

（参考になった点）
- 学校の授業では経験できない本物の体験が実際体験できるところに感心させられた。
- 県全域にわたる規模で実施していて，その規模の大きさに感銘を受けた。
- ６年前に始めたきっかけは何だったのか？→県で実施した調査の結果から，学校以外の学びの場が多くないと感じている市町が多いことが分かり，何かできないかと考えたときに，既に高等教育機関や企業が単独で実施していた体験学習に着目し，これを県レベルで集約し，とちぎ子どもの未来創造大学として開催したことがきっかけである。高等教育機関や企業の側も県域を対象に募集することに繋がり，ウィンウィンの関係を構築できた。開設当初，平成 26 年は協力機関が 25 カ所であったが，令和元年度は 72 カ所まで増えた。

（課題の解決方法）
- 課題としてマンネリ化をあげているが，子どもたちにアンケートをとって子どものニーズに合った内容を考えていくと良いのではないか。→全体をとおして見るとマンネリ化の傾向も見られるが，講座ごとに子どもたちからはアンケートをとっており，実施機関によっては講座内容や定員を見直しながら実施しているところもある。

（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）
●これまでに延べ 15,000 人以上の子どもたちが「本物」体験講座に参加してきたが，今後も子どもたちの学びを支えるとともに，人と人とのつながりによる協働の仕組みづくりを進めていきたい。

１日目　１２月7日（土）　④１６：３０～１７：１５　　会場（分科会Ⅳ：小会議室）

Ｈ　セルフディスカバリーキャンプ 2019
～青少年教育施設を活用したネット依存対策推進事業～

文部科学省の委託を受けて，独立行政法人国立青少年教育振興機構本部と独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター，国立赤城青少年交流の家が連携し，ネット依存又はネット依存傾向の青少年を対象に行った８泊９日の（8/17～25）の宿泊体験事業について発表する。また，前年度（H26～30）までの参加者を対象としたセカンドフォローアップキャンプ（9/21～23），今年度の参加者を対象としたフォローアップキャンプ（11/2～4）についても，その概要について発表する。

国立赤城青少年交流の家　主任企画指導専門職　梁河　昌彦

【活動の工夫】

- 教育と医療の融合を目指す。
- メンターとして，過去の参加者や回復者の参加。
- 国立赤城青少年交流の家が中心となって行うプログラムと久里浜医療センター中心のプログラムが組まれている。
- SDiC フォローアップキャンプと SDiC セカンドフォローアップキャンプを開催し，参加者のその後の変容について検証している。
- 薬の管理や食事後の薬服用指示等に看護師の協力を得ている。

【活動の成果(○)と課題(□)】

○１日３食しっかり食べ決められた時間に入浴，就寝，起床等を心がけて生活することで，基本的生活習慣の回復への第一歩を踏み出せた。
○様々なプログラムに挑戦し，自分自身を見つめ直しながらの活動を通して，自分なりの目標や決意を持つことができた。
○メンターが参加者に密に寄り添って活動することで，仲間とのコミュニケーションをとることができるようになってきた。
□プログラムの構成，三者連携，メンター関係

【協　議】

（参考になった点）
- キャンプで脱却するのではなく，きっかけとなること。
- 最善のきっかけの場があることが参考になった。
- ネット依存に対する環境づくりが大きな課題である中，施設の特徴を活かした「目的がある環境づくり」がプログラミングされている。

（課題の解決方法）
- ネット依存になる前の子どものために学校，教育委員会，関係機関等と連携して何か手立てを考えていくことが大切。
- プログラムに時間的なゆとりをもたせるとともに，参加者が自由にゆったりと過ごし，自分と向き合う時間を作れるようにフリータイムの時間を多く取り入れるのは良いのではないか。
- キャンプに欠かせない存在であるメンターの人数（割合），休息時間のとり方，事前研修の持ち方等について，再検討する必要がある。

（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）
○ネット依存になる前の取組について検討し，実践していく。
○ネット依存への知識と，地域に対してどのくらいの方がいるのかを調査すること。
●機構本部，久里浜医療センター，国立赤城青少年交流の家の三者の連携強化及び情報交換（打ち合わせ）の場を密にしていく。
●新しいプログラム内容の作成。

１日目　１２月７日（土）　①１３：４５～１４：３０　　会場（分科会Ⅰ：大講座室）

Ⅰ　鉾田シティプロモーション事業
～学校・首都圏大学生・市民・行政と連携したまちづくり～

普通科及び専門学科に続く，第三の学科「総合学科」。本校は，県内で８校に設置されている中の一校である。「地域の諸問題に積極的に取り組み，振興に貢献できる人材づくり」を目標に掲げ，教育活動を行っている。まずは，本校並びに総合学科を紹介する。

そして，その教育活動の中で，メディア・マーケティング系列第一期生が，大学生などと取り組んだ「鉾田市まちづくりコンテスト」でプレゼンテーションする内容を今回発表する。

鉾田第二高等学校総合学科メディア・マーケティング系列　第２年次

【活動の工夫】

・学校統合により，以前より幅広い分野の学習ができるようになった。
・現在，地域に貢献できる人材の育成に力を入れている。
・地域産業のブランド化に向けた取り組みを，総合学科という強みを生かして行っている。

生産（農業科）→加工・付加価値（食品技術科，生活科学系列）→販売・広報（メディア・マーケティング系列）

【活動の成果(○)と課題(□)】

○行政や経済界との連携がしやすくなった。
○高校生の取り組みがメディアに取り上げられ，ブランド化に向けた活動が活発になっている。
○まちづくりコンテストに参加することで，学生の活躍の場が増えたり，廃校の活用案を市に提案できたりした。
□活動が大きくなるにつれて窓口の一本化や情報共有の困難さが浮き彫りになった。
□授業時数や予算の問題が大きくなってきた。

【協　議】

（参考になった点）
・総合学科の強みを生かして生産から販売まで分業しながら取り組んでいく姿が素晴らしく，一つのビジネスモデルとしてとらえることができた。

（まとめ）･･･今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）
○学校の教育課程内の取り組みなのか，それとも鉾田市の将来を考えての取り組みなのか，はっきりさせてはどうか。
●単発的な取り組みではなく，将来市外に出てもまた鉾田市に戻ってきて長く住んでもらえるようなまちづくりを目指して行っている。このような取り組みを高校生が率先して行っていると捉えてもらえるとありがたい。
●市には，学生の取り組みや提案に目を向けていただき，共に良い郷土を作っていくお手伝いを継続させていただきたい。

１日目　１２月７日（土）　②１４：４０～１５：２５　　会場（分科会Ⅱ：中講座室）

Ｊ　みなかみ町社会教育委員の活動
～生涯学習フェスティバルへの取組～

平成 23 年度から町教育委員会主催で「生涯学習大会」を実施してきたが，当時，来場者数は少なく，費用対効果が低い事業であった。

そこで，町は事業の見直しを社会教育委員に相談，委員会で検討の結果，平成 27 年度より社会教育委員が来賓の立場から企画・運営に助言・協力を行い，住民参加型の事業へ転換。平成 28 年度からは「生涯学習フェスティバル」とイベント名を変更し，主管団体として企画・運営の中心となり事業に携わる。その結果，年々来場者数が増加している。

今回は，この生涯学習フェスティバルへの取組を中心に，社会教育委員の活動について発表を行う。

みなかみ町社会教育委員　副委員長　鈴木　春美

【活動の工夫】

- 社会教育委員が積極的に事業の企画・運営に携わっている。
- 町内の生涯学習的取組を広く住民に周知し，周知方法についても改善している。
- 生涯学習活動を行っている団体間の交流を促進している。
- 社会教育委員も協力団体の選考について積極的に提案し，拡充を図っている。

【活動の成果(○)と課題(□)】

○住民参加型の事業に転換を図ったことで，来場者数，協力者数ともに，年々増加している。
○明確な事業目的の設定と見直しにより，年々改善が図られている。
□高齢者の参加をさらに促進する必要があるのではないか。
□実施メニューのマンネリ化を防止していく必要があるのではないか。

【協　議】

（参考になった点）
- 主体的な取組が大きな成果につながることが分かった。
- 社会教育委員と事務局が連携・協力した活発な取組が非常に参考になった。

（課題の解決方法）
- 子どもの活躍の場を増やしていくことで，高齢者の参加が促進されるのではないか。
- 高齢者自身が積極的に作品を出展し，ブースを出すことで，参加が促進されるのではないか。

（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）
○みなかみ町の「生涯学習フェスティバル」の取組を他市町村にも紹介していきたい。また，自市でも参考にしていきたい。
●社会教育委員と事務局が一つとなり「協働」し，目的をもって取り組んでいくことで，今後さらに「生涯学習」を拡大していきたい。

１日目　１２月７日（土）　③１５：３５～１６：２０　　会場（分科会Ⅳ：小講座室）

Ｋ　これからの多世代連携，持続性のある地域運営

本格的な少子高齢化社会の中で，地域の元気を継承し，子どもたちの生きる力や社会性を育むために平成 14 年から活動している「横内マイタウンスクール」を中心とした地域活動の概要，ならびに学校・公民館・地域福祉村との連携への取組と現状，課題について発表する。

横内子どもネットワーク協議会　鈴木　奏到

【活動の工夫】

- 世代間交流等を通じて「生きる力」を育むための教育環境づくりを目指している。
- オンとオフの使い分けというキーワードにより持続性のある活動になっている。

　オン：企画会議等
　オフ：サポーター懇親会（BBQ，ゴルフ等）
　　↓
　オフの参加者がその後運営側に回る。

【活動の成果(○)と課題(□)】

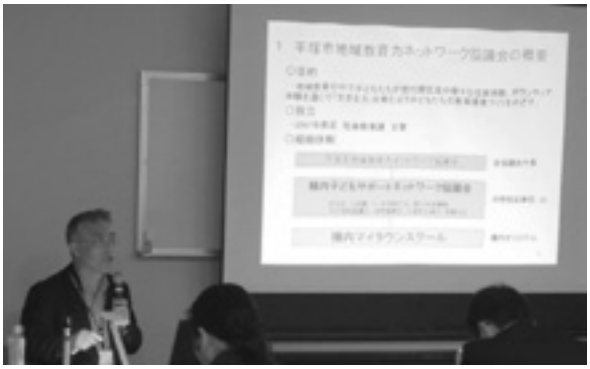
○父親の地域デビューのきっかけになった。
○地域人材の有効活用ができている。
○背伸びをせずに，身近な地域人材を活用している。
□次期会長へのバトンタッチ
□資金繰り

【協　議】

（参考になった点）
- 小学生時に参加していた子が，運営側として活動している点にこの会の持続性を感じた。
- オンとオフの活動というキーワードが印象に残った。
- 様々な団体や個人の得意分野の活かし方がうまく機能している。
- 身近にいる地域人材をうまく活用しているところは参考にしたい。

（課題の解決方法）
- 後継者について：ゆるく，広くつながることが大切で，その中から人材を探す楽しさをメインにすれば，長く続いていくのではないか？
- 資金繰りについて：文科省の助成金や自主財源でやりくりしている。地域人材を活用することで，様々な面で支援を受けている。

（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）
●次期会長について候補は何人かいるが，今後は次世代が持続できるような形作りをしながら取り組んでいきたい。



2019.8　防災キャンプ

１日目　１２月7日（土）　④１６：３０～１７：１５　　会場（分科会Ⅱ：中講座室）

Ｌ　「地域のつながる基盤を活かした連携・協働による安全で安心できる地域づくり」
～健康長寿・地域防災・子供の居場所～

社会教育施設である学習センターが地域課題解決に向けた地域のつながる基盤づくりのコーディネートを行いながら，食と健康づくり事業「よしいだ健康教室」，子どもの生きる力を育み地域の防災力向上を目指した事業「夏休み防災キャンプ」や，子どもの居場所づくりを通した多世代交流とつながりづくり事業「よしいだキッチン」を行い，学びを通じた連携・協働事業が地域への浸透につながっている。
実践を通した地域の担い手の育成とそれを支える職員力の継続が課題である。

福島市吉井田学習センター館長　矢吹　稔

【活動の工夫】

〇健康課題の解決
- 地域のつながる基盤づくりコーディネート
- 情報交換会（企画会議）

〇生きる力・地域防災力の向上
- 洪水ハザードマップの全世帯配付
- 夏休み防災キャンプ（小３～小６）
- 地域の方との企画・運営会議

〇子どもの居場所・多世代交流・つながりづくり
- 地域団体，ＮＰＯとの連携
- 寺子屋＆キッチン（高校生，大学生の協力）

【活動の成果(〇)と課題(□)】

〇健康づくりへの意識づけ，広がり
〇高齢者の社会参加
〇防災意識の浸透
〇多様な主体・担い手の連携・協働による地域の力の育成（地域のつながり→地域力の向上）
□今後どう継続していくか，どう実践していくか

【協　議】

（参考になった点）
- 地域活動の拠点の在り方。社会教育施設の役割として，一緒に考え，地道な活動を進めている。
- 施設や団体をつなぎ（ネットワークづくり），協働していくことで，地域課題の解決につなげている。

（課題の解決方法）
- 小学校との連携→日頃から管内小学校との往来を密にする。学校長に公民館運営審議会委員を務めてもらうなどすると連携がスムーズになる。
- 実践に移すために→生涯学習・社会教育施設の拠点としての学習センターの利点を活かす（関わり・場の提供）。ＮＰＯの力を借りる。ネットワークづくりを継続していく。
- 地域の担い手育成→実践・体験の場を作り，提供する。市職員も一緒に活動し学ぶことで成長する。

（まとめ）…今後の活動に向けて（〇参加者　●発表者）
〇長く継続，実践をするための手立てを考えていく。
●学びを通じて，地域のつながる基盤を広め深めながら，安全で安心して暮らせる地域づくりをすすめた

１日目　１２月７日（土）　①１３：４５～１４：３０　　会場（分科会Ⅳ：小講座室）

Ｍ　被災地で大学生が現地の方々と協力しながら試みる地域文化の復興
　　～被災地支援活動の持続性を目指して～

　コトノハチームが「被災地の記憶を伝える言葉を見出すためのプロジェクト」として，福島県南相馬市で被災された方々と行ってきた以下の活動について発表する。

　①被災以前にあった豊かな故郷について。大学生がお年寄りから傾聴したお話を元に絵本や紙芝居を制作するプロセスについて。②小高小学校「おなはしのへや」と一緒に，同校の読み聞かせ会においてコトノハチームが行う紙芝居の上演について。③被災地の言葉をひらくことをテーマに，詩人吉増剛造氏と子供たちのワークショップ「それぞれのそこの声」について。④原発事故で不可能になった食文化を再現・体験する「いのはなご飯を食べる会」について。⑤その他。

筑波大学「コトノハチーム」メンバーの筑波大学生

【活動の工夫】

・仮設住宅での住民同士のつながりをつくるため，ペットを中心とした取組を行っている。
・聞き取りをもとに絵本や紙芝居を作成し，震災前の豊かな故郷を伝えている。
・若い人と高齢者との交流の場として料理教室を行い，宣伝も積極的に行っている。
・茨城県やつくば市との交流が深まる内容を取り入れている。

【活動の成果(○)と課題(□)】

○冊子や絵本，紙芝居の制作は，被災された方々に喜んでもらえ，心の復興に繋がっている。
○宣伝を行うことで予想以上の人たちが集まった。
□記憶が風化しつつある中、被災地以外からの支援環境も悪化しつつあり，この活動も継続が厳しくなってきている。

【協　議】

（参考になった点）
・テーマの設定について，地域の中に入っているからこそ，適切な取り組みがなされている。
・定期的に活動をしているのはとてもありがたい。その経験や持っているノウハウを，別の場の支援にも是非活かして欲しい。
（課題の解決方法）
・活動の場が減っているのは健全なことである。一番の願いは，普通の日常に戻ることであるので，ゴールに向かっているということだと思う。しかし，仮設住宅が解消されない今，まだまだ支援が必要であり，特に心の復興は継続的に関わることが重要である。
（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）
○大学生同士の交流や協働ができたらよいと思った。　○文学や絵を通じて何かできると思った。
●今回の経験を活かし，息の長い活動を続けて行くことの意義を考えていきたい。
●交流が生まれる場について，さらに考えていきたい。

１日目　１２月７日（土）　②１４：４０～１５：２５　会場（分科会Ⅲ：共用会議室Ａ）

Ｎ　「じっくり聞いてしっかりつなげる」家庭教育
　　～家庭教育相談室「こころのオアシス」の取組～

西会津の家庭教育の取組
・西会津町の家庭教育支援活動の目的
・家庭教育相談室「こころのオアシス」の説明
・「じっくり聞いてしっかりつなげる」をモットーにした関係機関との連携
・活動内容（相談業務・各種イベント企画・企業訪問他）についての説明

西会津町家庭教育コーディネーター（兼）教育相談員　紫藤　真理子

【活動の工夫】

・家庭における教育力の向上と家庭の孤立化を防ぐために，地域学校協働活動事業として進めていった。
・相談室での相談，家庭教育講座，親子イベント，企業訪問を行い，保護者への学習機会の提供を行っている。
・家庭教育相談室「こころのオアシス」を小学校内（こども園・中学校併設）に開設した。
・相談室内に入りやすく，話しやすくするために，室内を４つに区切るなどレイアウトを工夫した。

【活動の成果(○)と課題(□)】

○コーディネーターが教育相談員や役所，教育委員会だけでなく，企業や警察署，子育て支援センターなど関係機関と密接に連携することでさまざまな相談に対応することができた。
○小学校（こども園・中学校隣接）に相談室を置くことで，児童生徒，保護者の往来が多く，気軽に立ち寄りやすいため，来室者数が多かった。
□さまざまな相談があるため，多様な問題に対応できる専門性が必要になってきた。（カウンセラーなど）

【協　議】

（参考になった点）
・「じっくり聞いてしっかりつなげる」というモットーが相談活動においては，とても重要なテーマであることがわかった。
・「学校」という人が集まる場所に，家庭教育相談室を設置したことで，来室者数が年々増えていった。
・相談内容を決めたりしないことで，家庭の問題や家族の悩み等，幅広い相談が寄せられた。
・相談室内ではプライバシーを守ったり，アロマや BGM など過ごしやすい雰囲気を作ったりすることで，リピーターが増えた。
（課題の解決方法）
・子どもたちも来室しやすい雰囲気なので，あまりにも居心地が良すぎてしまうのではないかという心配があったが，子どもたちとは約束（ルール）を決めて，今後も活動していくとよいのではないか。
・特別支援学級との連携はあるようだが，今後は特別支援学校との連携も取りながら，障害をもった児童生徒の対応にあたっていくと，よりよい相談活動ができるのではないか。
（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）
○家庭教育相談室という名称だが，関係機関としっかりつながっているために，いろいろな方々が情報交換をする場になっているので，参考にしていきたい。
●今までの活動が少しずつ軌道に乗ってきたので，今後も学校に併設した「こころのオアシス」を継続していけるように行政や学校に依頼している。

１日目　１２月7日（土）　③１５：３５～１６：２０　　会場（分科会Ⅱ：中講座室）

○　外国人支援の取組について
　　～学校や地域等における多様な支援～

人口の８％が外国籍住民である常総市で日系ブラジル，フィリピンの子どもたちの学習支援を 10 年前から継続。４年前の鬼怒川水害で空き家になった場所を改修し，多文化保育園や学童保育，カフェを開設。保育や学童保育では日本語初期指導も行い，外国ルーツの保育人材育成にも取り組む。今年度は県教育委員会の委託で県内学校に通訳や日本語指導に関する支援も行なっている。外国人当事者によるピアサポーター養成や災害時支援にも取り組んでいる。

茨城ＮＰＯセンター・コモンズ　横田　能洋

【活動の工夫】

・外国籍の方の困り感を捉え，各セクターや関連機関，外国籍の仲間と連携し支援している。
・外国人就労・就学サポートセンターを解説し，ヘルパー養成，日本語教室等に取り組んでいる。
・外国の子どもたちの就学をサポートするため，プレスクールやアフタースクール，通訳付きの高校進学ガイダンスを行っている。
・被災した空き家を多文化・多世代交流の拠点にしていく取組を進めている。

【活動の成果(○)と課題(□)】

○ピアサポーターを養成することで，多文化共生のまちづくり・人づくりを進めている。
○外国籍世帯への定住化支援が少しずつ進められている。
□外国人支援における行政放送，文書の多言語化の必要性がある。
□外国人の勤務先との連携が必要不可欠である。

【協　議】

（参考になった点）
・子どもがＩＣＴを活用して，親世代にゴミ出しのルールを教えている取組が参考になった。
・小学校入学前のプレスクールが充実していることがわかった。
（課題の解決方法）
・ＮＰＯとして素晴らしい取組だが，空き家の買取など事業の運営資金のやり繰りが大変だと思う。県や市町村，各セクター等とのさらなる連携・協働が必要である。
・外国籍の方が活躍できる場，自信をもって取り組める活動を設定し，さらに地域の日本人も巻き込みながら地域づくりにつなげていくことが大切である。
（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）
○国際交流団体のボランティアをしているので，コモンズ・グローバルセンターの取組が大変参考になった。今後も，協力を依頼したい。
●幼児向けのプレスクール，０～１８歳までを支援できる環境づくり，フリースクールを充実させたい。
●外国籍の方の力を生かして，多文化共生のまちづくりを進めたい。

１日目　１２月7日（土）　④１６：３０～１７：１５　会場（分科会Ⅲ：共用会議室Ａ）

Ｐ　地域課題解決型学習の展開
～さくら市家庭教育支援チームの取り組み～

栃木県さくら市の家庭教育支援チームは，18 名のメンバーで家庭教育支援イベントや託児，広報活動に取り組んでいる。平成 30 年度には，地域課題解決型学習プログラム「地域元気プログラム」を活用した講座を実施した。講座をとおして，地域全体で子育て世代を支えていくことの必要性を考えるきっかけとなった。

家庭教育支援チーム員が，実際に講座を実施するまでの過程や講座の実施をとおして感じたこと，そしてこれからの地域づくりについて発表する。

栃木県さくら市家庭教育支援チーム

【活動の工夫】

- 家庭教育支援チームのメンバー構成
- 様々な家庭教育支援イベントの開催
  ※託児室の設置
- 「地域元気プログラム」を活用したモデル事業の実施
- 地域の見守り世代を対象にプログラムを実施
- 市内の生涯学習情報誌の有効活用
- マトリクス図を用いた，意見の共有

【活動の成果(○)と課題(□)】

○参加者アンケートより，地域の一員として子どもたちを支えていく意識の高まりと，その重要性の理解の深まりが見られた。
○交流を通して，団体と支援チームや地域住民同士のつながりが強い。
○地域には，子育てに積極的にかかわろうとしてくださる方（見守り世代）がたくさんいるということに気づいた。
□１回ごとのプログラムによって対象者の人数や年齢に差が生じて，同じように進行することが難しかった。

【協　議】

（参考になった点）
- 当初は福祉部と連携していたが，その後，生涯学習課のみで担当した。現在の事業に福祉関係の方々がかかわることで対応している。
- 相手方からのニーズがあったわけではなく，チームのメンバーに様々な立場の人がいて，多方面に顔が利くこと，また，市の様々な事業に積極的にかかわっている人が多く，活躍の場を広げることができた。

（課題の解決方法）
- プログラムによって，対象者の人数や年齢に差が生じて，毎回，同じように進行することが難しかったが，進行方法や発問を変化，工夫することで対応した。
- アンケート結果から，「地域の一員として子どもを支えること」の重要性は理解できるが，「本当に実践できるのか不安」という声があった。これについては，「学校支援ボランティア研修会」の実施，「さくら市学びガイド」掲載のプログラムの実施により成果を上げることが出来た。

（まとめ）…今後の活動に向けて（○参加者　●発表者）
○同じような取り組みを自分の自治体でも実施したい。
●子育て世代の思いや願いを理解し，地域とつながる機会をつくりたい。
●「地域元気プログラム」を通して，地域住民がさらにつながり，「地域全体での子育て」や「地域の活性化」が図れるように取り組みを継続していきたい。

６　発表者の方へ　～メッセージカードより～

学校と地域の未来をデザインする

発表テーマ		発表者	
A	**地域と連携・協働した教育の推進** ～「学校地域WIN-WINプロジェクト」「学校と地域の未来を創ろう！プロジェクト」の取組～	埼玉県	埼玉県教育局市町村支援部 生涯学習推進課地域教育幹 上松　寿明　氏

（発表者へのメッセージ）

大変すばらしい取組と分かりやすい説明でした。よりよい学校教育を通じてよりよい社会をつくるという新学習指導要領の目指すべきところが実現されていることに感心しました。大変参考になりました。

ふるさと創生プロジェクトって大切だなと思います。地域に貢献できる人材を小・中・高で地域とともに育てていくのだと改めて思いました。ありがとうございました。

ＷＩＮ-ＷＩＮ。子供たちには，自分の住む地域にどんな企業があり，どんな仕事があるのかを知ることができる良い機会になっていると思う。将来の進路選択にも繋がると思う。

発表テーマ		発表者	
B	**学校と地域のパートナーシップ体制の構築** ～複合施設を核とした学校・地域住民等の連携・協働の取組～	東京都	小平市学校支援コーディネーターネットワーク　会長　布　明子 氏

地域・公民館・図書館・学校がしっかりと連携しており，とても素晴らしい実践の積み重ねをされていてとても感心しました。子供たちの選ぶ図書選定という発想は大変参考になりました。（テラスうらやましいです！！）

熱意ある取組を継続して…とてもすばらしい。児・生（小中高から大学生まで），地域の視線，利用者だけでなく，在り方・狙いがブレない一つ一つが広がり広まっていく。分かりやすい発表でした。

高校生の視点からまちづくりのアイディアを考えていることは頼もしく，そして参考になる取組でした。地元でも仕掛けづくりをしていきたいと思います。

発表テーマ		発表者	
C	**地域と学校をつなぐ「良い」加減（いいかげん）なコーディネートとは？** ～ふくだ子どもの学び支援本部の実践～	千葉県	野田市地域教育コーディネーター 野田市立福田中学校　川崎　貴志 氏

熱い想いが伝わる発表で，実践者こそ語れる大変参考になる内容でした。タイトルにもある「良い加減」がコーディネーターにはとても大切で，地域の人材を見つける際のポイントもとても「良い考え」だと思いました。

15年間ほどＰＴＡに携わり，学校のため，子供たちのためにやってきた後，現在ではコーディネーターとして学校・子供たちを支えていて素敵だなと思いました。ありがとうございました。

様々な体験授業があって中学生はとても楽しそうだと思った。学校側の要求に応えることができる地域との繋がりをたくさん持っているコーディネーターがもっと増えていくと良いと思った。

発表テーマ		発表者	
D	**川口市における「地域学校協働活動」の推進**	埼玉県	埼玉県川口市教育局生涯学習部 生涯学習課社会教育主事 市川　重彦 氏

とても分かりやすい説明と，素晴らしい事例ですごく勉強になりました。職員の熱い想いがとても大事だと実感しました。また何かあれば，ご相談させて下さい。

まず発表の仕方，人の興味の引きつけ方が学びになりました。楽しかったです。本当の意味で，みんなが「ＷＩＮ-ＷＩＮ-ＷＩＮ」になれる活動を目指していきたいですね。ありがとうございました。

素晴らしい事例をありがとうございました。コミスク，地域学校協働活動への流れは今後義務になると思われます。行政としてどう働きかけるべきかとても参考になりました。

学びの施設の活動をデザインする

	発表テーマ	発表者	
E	**学校・地域・行政の連携した取組** ～足利市学校図書館（小中高8校）の Before・After～	茨城県	学校図書館よくし隊　勝山　万里子 氏

（発表者へのメッセージ）

子供に対する図書の勧め方…それによって子供の進路が大きく変わった素晴らしさ。環境を整えるだけで，図書室が大きく変わることが分かった。県・市町村での取組と現場の願いの情報交換の大切さに気付いた。

司書の先生として，「学校図書館」の機能を茨城県に”伝授”していただき，感謝します。図書館システム導入は「当たり前」との回答が私の次の一歩への後押しとなりました。

自分が勤務している学校の図書館にもっと関心を持って見ていかなければならないなと反省しました。小・中・高の連携について，具体的な例や取組について聞きたかったです。

	発表テーマ	発表者	
F	**有秋散策地図　文化財マップをつくろう** ～中高校生と公民館の連携の取組～	千葉県	市原市立有秋公民館 社会教育指導員　松本　明子 氏

中高生に集まってもらって事業をするという発想が素晴らしいです。地域の古い歴史を勉強しながら大変だったと思われました。各学校でつくっている危険マップに文化を記入するのもいいですね。

自分の住んでいる地域を知ることは重要。地域には色々の側面はあると思うが，（歴史・自然・産業…）それを知ることにより，愛着，誇りも出てくると思う。それが人間にとって大きな財産になると思う。

鎌倉街道の文化財と健康増進，そして発信すること，とても参考になりました。読みものを作っているとのことですが，物語などにできれば学校で使ってもらえるのでは？

	発表テーマ	発表者	
G	**とちぎ子どもの未来創造大学（６年目）の取組** ～大学・企業等との連携をとおして～	栃木県	栃木県教育委員会事務局 生涯学習課生涯学習振興担当 社会教育主事　黒尾　貴英 氏

参加する子供は毎年年齢が上がり，新しい子供の参加もあると思いますので，今ある講座を大事に継続する形でよいのでは？同じ体験の中からでも新しい発見・学びができる子供たちのパワーを日々感じています。

栃木ファンです。手帳を持って歩いています。ステップアップし最終ステージです。魅力はそこでお勉強させてもらったことで強く感じました。（でないとなかなかいけない所ですものね。一生モノです。）

子供が学ぶため（講座に参加するため）には家庭の協力が不可欠です。送迎，教材費の協力等難しいなと思いました。家庭の協力が得られない子供たちにも，学びの場を与えられる工夫を考えていただけたらと思いました。

	発表テーマ	発表者	
H	**セルフディスカバリーキャンプ2019** ～青少年教育施設を活用した ネット依存対策推進事業～	国立施設	国立赤城青少年交流の家 主任企画指導専門職　梁河　昌彦 氏

実のある実践発表をありがとうございました。連携を深めるということは共通のテーマだと感じます。今後の取組の参考とさせていただきます。

本市では10泊11日のキャンプをしています。日数については以下のように聞き，感じています。2泊～3泊→楽しいで終わる。　4泊～5泊→ケンカで終わる。人の心の交流は10日は必要。ありがとうございました。

非常にチャレンジとなる事業だと思います。モデルとして実践していただく意味が大きいテーマですが，久里浜というネット専門の医療機関が他の地域にも増え，広がると他の地域でもできるかと思いました。

持続可能な地域をデザインする

発表テーマ		発表者	
I	**鉾田シティプロモーション事業** ～学校・首都圏大学生・市民・行政と 連携したまちづくり～	茨城県	鉾田第二高等学校総合学科 メディア・マーケティング系列 第２年次

（発表者へのメッセージ）

小中学校とは違い，高校になると多くの地域から通学している生徒が多いと思われますが，自分たちが通う高校がある地元とのコミュニケーションの場が増えるというのは今後期待できると思います。

「Hokotta」が非常に目を引き興味を持たれると思いますので，PRの意味も込めてしっかり発表されると好感を持たれると思います。高校生として立派だし，これからの貴重な人間資料だと思います。応援してます。

総合学科の特性を活かして，地域とともに生徒たちが成長して欲しいと願っています。学んだ生徒たちが「地元で生きていきたい！」となってくれることを望みます。

発表テーマ		発表者	
J	**みなかみ町社会教育委員の活動** ～生涯学習フェスティバルへの取組～	茨城県	みなかみ町社会教育委員 副委員長　鈴木 春美 氏

社会教育委員ならではの企画が出されることをご期待いたします。行政職員では考えつかないような内容を考えていただけますように。今後のご活躍をご期待いたします。

観光業が盛んとのことでしたが，社会教育委員のみなさんをはじめとした地域住民の活躍も，みなかみ町の活力になっていると思いました。今後も楽しみながら活動を続けていただきたいと思います。

主体的になると，これほどまでに変わるのかとびっくりしました。「自ら楽しみ」というフレーズがキーワードかなと思いました。素晴らしい取組なので是非，色々な所で参考事例として広めて下さい。

発表テーマ		発表者	
K	**これからの多世代連携，持続性のある地域運営**	神奈川県	横内子どもサポート ネットワーク協議会　鈴木 奏到 氏

「楽しみから活動する」「担い手をつくる活動」について興味深く発表を聞くことができてとても良かったです。素晴らしい取組を参考にさせて頂きます。

素晴らしい事例をありがとうございました。これからの目指すべき地域のあり方を示唆していただき，大変参考になりました。「学校を核とした地域づくり」に向けて，今後ますます発展していくことをご祈念致します。

実践事例発表の中から，ネットワークづくり，そして次代へつなぐ交流のヒントを得る事が出来ました。ありがとうございました。

発表テーマ		発表者	
L	**「地域のつながる基盤を活かした連携・協働による安全で安心できる地域づくり」** ～健康長寿・地域防災・子供の居場所～	福島県	福島市吉井田学習センター 館長　矢吹　稔 氏

色々な体験をされている事はいざという時に役に立つと思います。もっと危機感を持っていたいと思いました。貴重な発表，ありがとうございました。

茨城県民です。小中一貫校，或いは中高一貫校が進んでいますが，貴市の小学校数，中学校数，私立幼稚園数，うらやましく思います。隅々まで行き届く配慮が良く感じました。今日はありがとうございました。

矢吹館長のお考え，課題解決に向けてのコーディネートが素晴らしいと感じました。この資料を自分のセンターに生かしていけるようにしていきたいです。

寄り添う心をデザインする

発表テーマ		発表者	
M	**被災地で大学生が現地の方々と協力しながら試みる地域文化の復興**	茨城県	筑波大学「コトノハチーム」 メンバーの筑波大学生

（発表者へのメッセージ）

若い方たちは特に被災地に近づきたくないと思う方も多い中，支援活動に協力頂いて大変感謝します。これからも少しでも早く，明るく住めるように支援を続けていただけたらと思います。

東京ではすでに3.11が「記念日」になってしまっているようです。震災から時間が経つにつれ，3.11が「記念日」になることに拍車がかかるのではないかと思います。どうぞ後輩の皆さんに受け継いで下さい。

祖母の生前に戦争体験を聞きたかったが，あまり話をしてくれず亡くなってしまった。経験をした人に聞きたかったという後悔がある。経験者の言葉は重い。これからも生の声を聴く活動を続けて下さい。

発表テーマ		発表者	
N	**「じっくり聞いてしっかりつなげる」家庭教育** ～家庭教育相談室「こころのアオシス」の取組～	福島県	西会津町家庭教育 コーディネーター（兼）教育相談員 紫藤 真理子 氏

素晴らしい事例をありがとうございました。地域のつながりを仕掛けるためには，コーディネーターの役割は重要だと思います。是非，今後も活躍してくださる事を期待しております。

ご自身のスキルアップのために努力されていることが素晴らしい。他分野の方々との連携を深め，役割分担を明確にし，関わる方々が少しずつでも歩み寄る事で負担が分散され，継続した活動ができていると思います。

相談内容は人それぞれでも，自分の悩みを話すのはそれなりに覚悟を決めてくると思う。その中でオアシスのような優しい雰囲気で迎えられると，心も開きやすくて良いと思った。

発表テーマ		発表者	
O	**外国人支援の取組について** ～学校や地域等における多様な支援～	茨城県	茨城ＮＰＯセンター・コモンズ 横田　能洋　氏

災害の際の外国人に向けた情報発信の大切さを知りました。自分が外国に行ったときに言葉が分かれば早い避難ができ，被害も最小に防げると思われます。今後もご活躍をお祈りしております。

常総市の水害のとき，支援物資を配布するボランティアに行きました。その時ブラジルの方が多いのに驚いた記憶があります。水害というピンチを外国人支援のチャンスにされた横田さん，すごいです。

大変レベルの高い活動をされていることに驚き，素晴らしいと感じました。こんなにたくさんの支援の種類があること，これに気付いて実現されていることが驚きです。ぜひ活動を続けて充実させて頂きたいです。

発表テーマ		発表者	
P	**地域課題解決型学習の展開** ～さくら市家庭教育支援チームの取組～	栃木県	栃木県さくら市家庭教育支援チーム

地域の課題解決のための切り口をして”家庭教育支援”を取り入れていることを，県内，地区内でも市町村の実態に合わせて教えていくこともできると紹介していきたい。

子育てについて熱心な取組に感心しました。子育てにはどんなに多くの人が関わっても多すぎることはないと思います。子育て支援の仲間がたくさん増えることをお祈りします。

家庭教育支援チームで役割を決めての報告方法は，分かりやすくとても良かったと思う。今後どのように子育て世代にアプローチしていくのかが気になりました。いろいろな課題解決のために心より応援しております。

7　情報交換会　1日目　12月7日（土）18：10～

各発表者，実行委員，運営スタッフが一同に会し，和やかな雰囲気の中で情報交換会が開催されました。交流の輪が更に広がる場となりました。

８　分科会報告　2日目　１2月8日（日）９：２０～１０：２０

１日目の各分科会の発表内容を担当者から参加者にダイジェストで伝えていただきました。

９　クロージング　2日目　12月８日（日）１１：50～

登 壇 者：茨城県水戸生涯学習センター所長 小沼　公道 氏
茨城県立白浜少年自然の家所長　佐藤　孝弘 氏

小沼所長と佐藤所長によるユーモアを交えた２日間の振り返りが行われ，大会を締めくくりました。

10　第５回大会を終えて　～主催者からメッセージ～

歴史を創る人

歴史を語る人は「今」が到達点
しかし，歴史を創る人は「今」が出発点

今年も，歴史を創る人が水戸の地に参集した
刻々と変化する社会の意味をとらえ返し，新しい明日をデザインするために参集した

言いたいことは両の手に余るほどだ
でも，同じ思いで活動している仲間の声も聞きたいのだ
時間はいつも後から追いかけてきて，私たちの背中をたたくのだ

世界は動いている
私たちは間違いなくこの時代を生きている
「幸せのカタチ」も揺れている
生涯学習は，そして社会教育は，何ができるのだろうか
何を創っていくべきなのだろうか

歴史を語る人は「今」が到達点
しかし，歴史を創る人は「今」が出発点

世界はSDGs，日本は「SOCIETY5.0」，子どもの学力はPISA型…
社会教育は「見えない現状を見る力」を創造し続けてきた

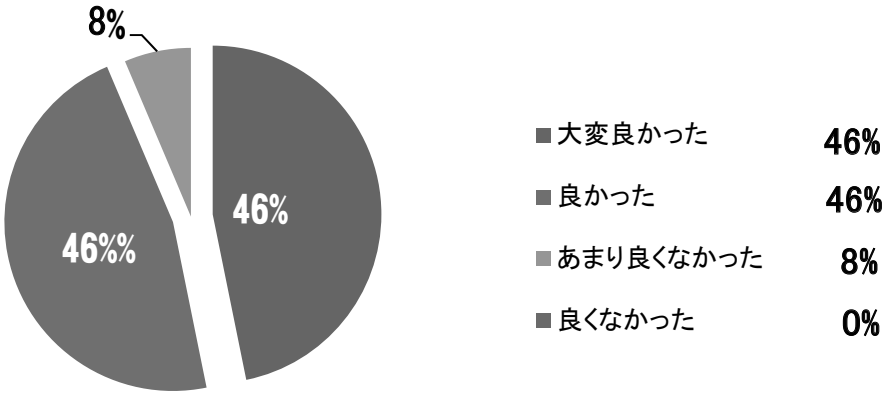
やらなきゃならないことは両の手からこぼれるほどだ
でも，その根底には「みんなの幸せ」が息づいている
だから，追いかけてくる時間を超えて明日を創ろうとするのだ

昨日は変えられない
しかし，明日は変えられる
仲間との交流はその事実を教えてくれる
頭の奥から「もう少し，頑張ってみるか。もう少し・・・」と言う声が聞こえてくる

来年もまた，水戸で会いましょう
ここで，こうしてある自分や，こうしてある仲間に会いましょう

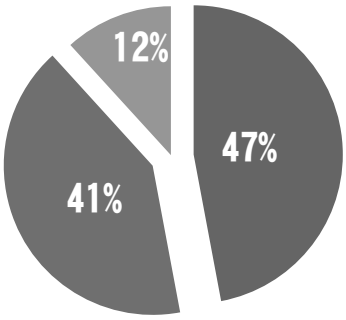
１１　アンケートより

1　事例発表（1日目）



○ 具体的な活動，支援団体の動きを知ることができた。教員になり，困った際に連絡すれば，こういうつながりあると分かっただけでも，心強いと思った。こういう学びが広がってほしいです。
○ 学生の方が発表していたり，こんなことをしている方がいるんだ，という発見がたくさんあり，とても勉強になりました。
○ 様々な分野について，どのように活動をしているのかを知ることができた。課題についても私たちも実際に考え，発表・伝え合う場があり，とても勉強になりました。
○ 教育学科に所属しているので，普段は知ることができない現場の取組を知る機会になった。
○ 毎回様々な自治体の多様な活動について，知ることができ勉強になります。
○ たくさんの事例を聞けて勉強になりました。参考になったので，今後できることを取り入れていきたいです。
○ 様々な方々の話を聞き，地域や企画等で活用できることが多々あり，とても参考になったと思う。
○ 鉾田二高のシティプロモーションの発表が大変すばらしかった。生徒が自分たちで考えたことを実現し，鉾田市を活性化していきたいと取り組んでいた。
○ いろいろな活動をしている人たち・グループは確かにたくさんあるのに，それが「点」であるうちはなかなか見えてこない。このような大会で，その「点」をつないでいただいてありがたいです。社会教育の星座ですね。
○ 社会教育として取り組むべき課題がたくさんあることを痛感しました。
○ 各地区・各団体でいろいろと工夫し活動していることがわかりました。私も今日の活動を参考にして活動していきたい。
○ 各分野で様々な取組があり，聞いていてたくさんのアイデアがわいてきた。
○ 参加者同士で情報交換ができたのは良かった。
○ 各分科会では，有意義な発表であった。知らない取組を知ることができ，今後の事業やイベントの参考になる話が聞けて良かった。
● 茨城から派遣している国立施設職員の発表は，毎年1コマは入れてほしい。
● 協議の時間が長いため，発表の時間が短かった。もっと実践情報を聞き，自分の活動に生かしたかったので残念です。
● 発表についての質問時間がほしい。話合いの時間が短い。協議カードを書きながら発表を聞くのは困難です。
● 事例が参考になった。ただグループディスカッションのテーマが，合っていたか。「課題の解決策」とあり，課題の整理で終わってしまったときもあった。
● 発表事例はすばらしかったが，課題を見つけることは難しかった。
● 大変興味深く聞けた。発表の時間を短く，質疑応答を長くとっていただきたい。知りたいことが聞けず若干消化不良だった。

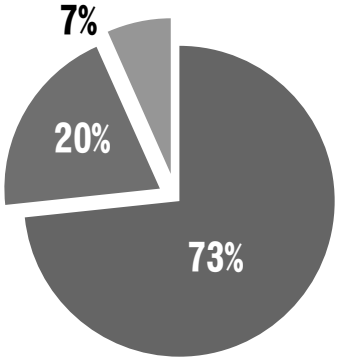
2　分科会報告（２日目）



■大変良かった　47%
■良かった　41%
■あまり良くなかった　12%
■良くなかった　0%

○ ポイントを丁寧にご紹介いただきありがとうございました。
○ 前日の様子が分かって良かった。各分野の取組を聞き，前向きな気持ちが沸いてくる。
○ 昨日参加できなかったが，ポイントを絞り報告していただいたので，内容がよく分かった。
○ 丁寧に報告していただき，1日目不参加でも分かりやすかったです。
○ 昨日参加できない人にもわかるように丁寧に説明されていると感じた。
○ 2日目だけの参加だったので，1日目の内容を聞けて有意義でした。
○ 他の分科会の内容を聞くことができ，報告会はよいアイディアであると感じた。
○ 分かりやすく振り返ることができた。資料だけでも参加できなかった分科会のものがほしかった。
○ 聞けなかった他の分科会の事例を聞くことができ良かった。
● 報告60分は長すぎる。せめて30分間，ポイントだけをスライドショーでどうでしょうか。
● 報告が長すぎた。各分科会の4つの事例全てを報告するのは大変ですね。
● 各事例のアンケートの紹介があった方が良かったと思う。

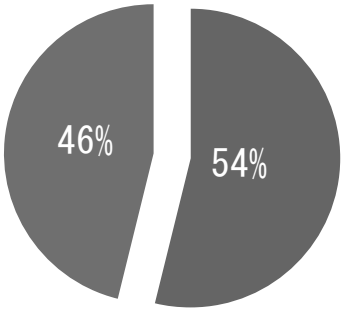
3　基調講演（２日目）



■大変良かった　73%
■良かった　20%
■あまり良くなかった　7%
■良くなかった　0%

○ 示唆に富んだ講演内容で，体系的に理解できた。
○ ポートフェリオが生きる時代がやってくると言う話が印象的であった。社会で活躍できる子どもたちを育てていきたい。
○ これまでの流れがよく分かり，これからの重要性についても考えることができ，参考になった。
○ 時代の変化の中で，社会教育や生涯学習の在り方も変化しながらその役割も重要だと感じた。
○ これからすべきことの道しるべをいただいた。
○ 自分が携わっている生涯学習について，自分の実感を裏付けることができる内容で，すばらしかった。
○ 社会教育の必要性，必然性を改めて実感することができた。
○ これからの社会教育の目指す方向性について，話を聞くことができて有意義であった。
○ 社会教育の可能性は，とても大きいものだと感じました。
○ 社会教育行政の現在，未来が分かった。

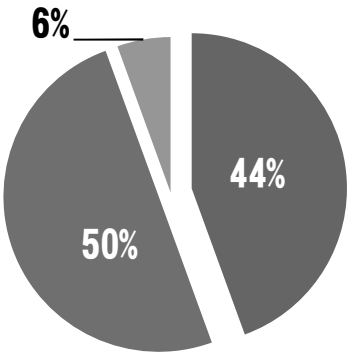
4　クロージング（2日目）



■大変良かった　54%
■良かった　46%
■あまり良くなかった　0%
■良くなかった　0%

○ ひたちのみらいをデザインしたいと思いました。
○ 最後にほっと一息つける時間でした。
○ 二人の所長のかけ合いが楽しかった。
○ 小沼先生，佐藤先生の会話による振り返りが社会教育にふさわしいと思いました。
○ お二人の話の中から，社会教育のヒントになることがいろいろ感じられた。
○ 今後の展開に期待しています。7色を混ぜ合わせるとグレーになる，すべての色を包摂した色，見方によって変わることを感じた。

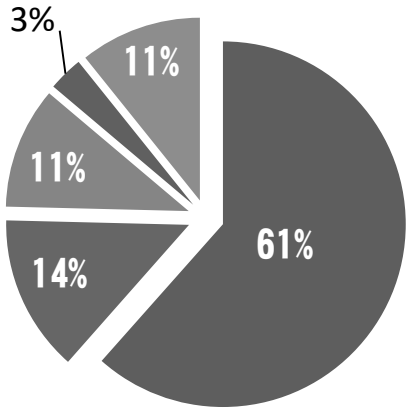
5　本大会全般



■大変良かった　44%
■良かった　50%
■あまり良くなかった　6%
■良くなかった　0%

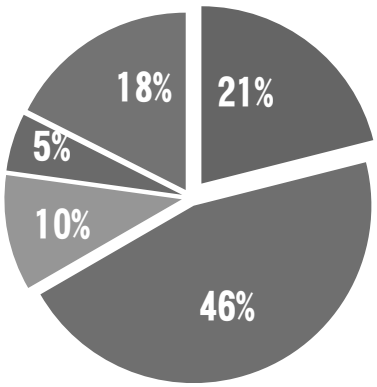
○ お世話になりありがとうございました。初めての水戸訪問，想い出に残ります。
○ 短い時間の参加になってしまったが，半日だけでも大変参考になる有意義な時間となりました。
○ 1日目参加できず残念でした。また参加させていただきたいと思います。
○ 素敵な会を開いていただきありがとうございました。よいものは続く，続ければよいものになるということでこれからも続けていただけると嬉しいです。ありがとうございました。
○ 2日間、全国各地から社会教育の同士が集まる交流会は大変勉強になり，楽しい時間を過ごすことができた。
○ ぜひ次年度以降も水戸センター＆県立図書館で開催をお願いいたします。
● 意見の集約が難しいと思うがしてもらいたかった。
● 地域サイドから生涯学習を支援してきたので，そういう立場の方にももっと参加していただきたかった。
● 茨大での開催に比べて少々狭くて動きにくい。第1日目毎回感じるが、盛り込み過ぎである。1時限を長くして，もう少し深く考えるようにしてほしい。（発表事例件数をしぼる）

6 この大会をきっかけに，あなた自身にどんな変化がありましたか。



■新たな気づきがあった	61%
■ネットワークが広がった	14%
■自分の活動に自信が持てた	11%
■特に変化はなかった	3%
■その他	0%
■無回答	11%

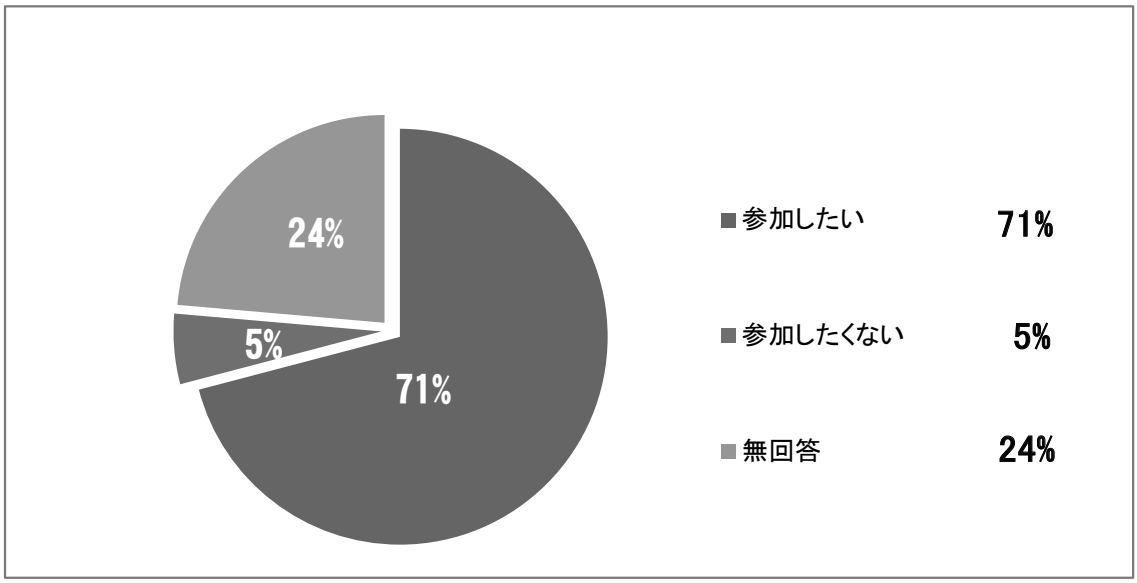
7 今後の具体的な活動について，どのようにお考えですか。



■これから何か活動をしようとしいている	21%
■今までの活動を見直したい	46%
■特に具体的な活動は考えていない	10%
■その他	5%
■無回答	18%

○ これまでの活動を振り返り，収集できたアイデアを取り入れたり新たに見つけたアイデアを取り入れりしていきたい。取組の視点を変えるだけで活動が変わることを大切にしていきたい。
○ 「Ｗｉｎ－Ｗｉｎの関係」になるような・・・という事例はなるほどと思った。その考えを根底に起ながら今後の計画を見直していきたい。
○ ＷｉｎＷｉｎプロジェクト　企業の一員としてできることを企画実践していきたい。
○ 地域の人材はどの資源の発掘やＷｉｎＷｉｎの関係を構築できるようにしていきたいです。
○ 小学校と鉾田二高の連携を考えている。
○ 学校図書館ボランティアの育成と活用
○ 横内子どもサポートネットワーク協議会の持続的な活動（楽しんで活動すること）
○ 子どもに呼びかけた講座です。参考にして今年度中に立ち上げます。

8 次年度の交流会に参加したいと思いますか。



9 その他，お気づきの点，ご意見，ご感想等をご記入ください。

○ 茨城の生涯学習，社会教育が大変熱く，自分も頑張ろうと新たな元気をもらいました。
○ 茨城県の社会教育への力の入れ方がとても大きいことが分かりました。すばらしいです。そのうえ県内で終わりにせず「関東近県」としているところがありがたいと思いました。ぜひ来年も参加したいと思います。よろしくお願いいたします。
○ 分科会のグルーピングが工夫されていて面白いと思いました。
● 社会教育の管理者，実施者側の事例発表が多かった。受講している市民支援者側の発表もいくつかあれば参考になると思います。どれを聞くか迷うので，もう少し詳しい内容（当日配布資料程度）をHPでもアップしていただければと思います。
● 事務局をはじめ担当者の皆様，大変お世話になりありがとうございました。水戸生涯学習センターと県立図書館に会場が変更になったが，これはこれでよかったと思います。ぜひこの2施設を拠点に継続開催していただきたいと思います。期日は早めに決定し，広報期間を長くした方がよいと思います。Facebookも当日の投稿よりも，事前の広報に重点をおいた方が参加者にも情報が分かって参加しやすくなると思います。
● 会場が大学ではなくなったことは，イメージとして水戸の教育が一つの拠点で行われなくなってしまったのかと残念な気持ちになりましたが，県立図書館で実施できたことは案外よかったのかもしれないと感じました。弘道館などの見学をコラボできるとおもしろいなと感じました。
● 三の丸開催であれば，2日目午後オプショナルツアーで弘道館，偕楽園，歴史館などへ行きたくなるような案内をしてはいかがでしょうか。
● 短い時間での発表になっているので，ここまで来て受ける必要があったのかな･･･と残念に思い ました。もっともっと掘り下げていろいろ聞いてみたかったなと思います。聞いている人たちの感想交流も大切だと思いますが，もっと参加者の探求心を満たす活動になるといいなと思いました。
● 実戦事例発表が20分であったが，早口で時間を気にしなくてはいけない状況になるので，もう少しゆとりがあってもよいかと思う。（全体協議中ではどうしても質疑応答が多くなってしまうので）
● 事例発表団体を減らし，意見交換・協議の時間をもう少し長くすると，もっと学びが深まるのではないかと感じました。（①:13:45-14:45 ②15:00-16:00 ③16:15-17:15の3時間割など）
● 事例発表の件数を絞って1単位の時間を長くとるべきでは？
● もっとゆっくり事例発表を聞きたかったです。グループ協議というよりも，発表者への質問や感想くらいでよかったのでは。時間が足りなくバタバタでした。
● マイクの感度が悪く，聞きづらいのが気になりました。

12　成果と課題　～スタッフの振り返りカードより～

成果について

事例発表・分科会について

○分科会では，「『社会教育』を基盤とした、人づくり・つながりづくり・地域づくり」に向けた具体的な実践例を聞くことができ，今後の当センターにおける講座計画・運営の参考になった。
○分科会では多くの方々が参加し，それぞれの立場で，協議を活発に行っていた。多様な視点で，事例発表の内容を振り返ることができた。
○大会のテーマ「Design to Next」が素晴らしいです。事例発表を聞いて，明日へのどんな物語をつくるかと考えるもとになりました。
○今年度は，家庭教育支援に関する事例発表，地域学校協働活動に関する事例発表が多くあり，個人的には興味深かったです。

参加者について

○今年度は実行委員として参加させていただきましたが，関東近県はもとより，全国各地で活躍されている社会教育関係者の方々とつながりがもてるとてもよい機会であったと感じております。
○会場が変更になりましたが，参加者からもとても好評だったと伺いました。また，参加者も例年以上に多く，非常に充実した交流会であったということも伺いました。
○参加者の方から，他の分科会資料も各会場に用意していただけるとありがたいというご意見をいただきました。

交流会の運営について

○水戸生涯学習センターが会場ということで，４分科会でコンパクトに実施できて大変よかった。当日，臨機応変な対応も必要となってきたが，各部と連携して対応することができた。
○他県の方が実行委員に入ることで，他県の生涯学習・社会教育の状況を知ることができました。遠方からの参加となるので，他県の実行委員の方は，初日の集合時間を遅らせるなどの配慮があるとよいのではないかと思いました。
○駐車場には余裕もあり問題なかったと思います。会場の数が限られていたので部屋の大きさがまちまちだったのは，仕方ありませんでしたが，参加人数に対してはちょうどよかったと思います。

分科会報告について

○運営部の分科会報告者を担当した。分科会の業務分担が明確であったので，分科会報告の準備がしっかりとできた。・
○８日の分科会の報告は，なるべく短時間で簡潔にしたい。(１会場 10 分～12 分程度とすると１団体の説明が２分～３分程度が適当。)発表の形式を統一するとよい。

基調講演について

○２日目の合田講師の講演が社会状況の変化についてデータを元にしたもので，とても説得力があって大きな学びをさせていただいた。社会状況が大きく動いている今，少ない関係者だけで聞くのは勿体なかったと思う。

課題について

事例発表・分科会について

☆事例発表は，どれもが興味深い内容でした。自分の役割があり，他の興味がある事例発表に参加できないのが残念です。他の発表資料もいただけるとよいです

☆来年度は，以下の内容の事例発表で取り上げていただけたら幸いです。

①コミュニティスクール・地域学校協働活動に関する事例
文科省で，ＣＳマイスターとして活発な活動をされている方がたくさんいます。

②家庭教育支援に関する先進的な事例

③まちづくりに関する工夫された取組(特に，公民館を中心とした活動)

☆発表後に発表者ともっと交流できるとよいと思います。懇親会はすべての発表者が参加してはいなかったと思いますので。特に，遠方より来られた方は，発表していただくだけではもったいないです。

☆分科会事例発表の際にもう少し時間的な余裕があってもいいと感じました。特に参加者の方々が協議カードに記入する時間を設定していなかったため，思考を整理してからの協議とはいかなかったように感じました。

☆世代を担う若者たちによる発表や参加をもっと募りたい。(「ドリーム・パスのその後」が生まれれば，可能か？)

☆事例発表団体を厳選し，団体数を絞りこんで，協議時間を確保できたらよい。

☆発表団体や当日係員等，大勢を迎えて実施するので，1日目の流れを，実行委員で十分に理解して臨む必要がある。特に，分科会運営の当日打合せについては，誰が，どこで，何を説明するのか，会場準備の指揮を執るのは誰なのか等を，明確にしたい。

広報について

☆パンフレットの記載内容と発表場所については，ややわかりにくいところがあった。

☆関東近県ということで，県外の方の参加者が増えるとよいと感じています。前年度の内に日程（いつやるかだけでも）を広報できると，他県の方たちは計画を立てやすいと思いました。(参考に山口県の交流会では，閉会式で次年度の日程をお知らせしていました。)

開催方法について

☆今年度は国体のためこの時期になりましたが，10月頃がいいと思います。※9月下旬，10月上旬は，小学校運動会とかぶる可能性がありますが。

☆開催場所や時期がある程度固定されていた方が，参加や運営がしやすいと感じた。

☆今年度は，国体開催の関係で１２月の開催であった。来年度は元に戻し，９月の開催でも良いと思いますが，台風等の影響も懸念されるため，慎重に議論したい。

☆情報交換会は，とても盛り上がってよかった。しかし，場所については，再考の必要あり。

実行委員の組織体制について

☆実行委員の方は，年度当初からとても忙しそうに感じる。大会を行うことによってその県の振興に繋がっていく面もあるし，いろいろな運営方法やアイディアも出てくると思うので，各県輪番制に移行していけるといいのと思う。

☆各部会で協議されたことが，十分に共有されないまま当日を迎えた印象である。各部会を繋ぎ，全体を掌握できる仕組みが必要である。

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流

大会速報として，会場の様子や各分科会の発表者から感想をいただき，facebook ページに UP しました！
分科会の雰囲気がリアルタイムで伝わるとともに，活発な交流や協議の様子がいつでもご覧いただけます。

https://www.facebook.com/kankenko27/　　関東近県　Facebook

参 考 資 料

☆発表後の協議でカードをもとに話し合いをもちたいと思います。発表を聞きながら，カード上段に発表についてのご意見をまとめておいてください。
☆カードは，発表者にお渡しするため，回収させていただきます。カード下段の発表者へのメッセージもご記入下さい。
☆ご意見ご感想については，報告書や今後の交流会に活かしていきたいと思いますのでご協力よろしくお願いいたします。

協議カード

※当てはまる記号に〇を付けてください。

事例発表記号（ A B C D E F G H I J K L M N O P ）

〇どんなところが参考になりましたか。

〇課題の解決方法（ご自身の経験等から助言できることを書いてください。）

〇今後どのような活動に取り組んでみたいと思いましたか。

発表者の方へのメッセージ

第５回大会　関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会アンケート

本大会へのご参加ありがとうございました。今後の参考としますので，アンケートへのご協力をお願いいたします。該当する項目に〇を，感想欄には，ご意見ご感想をご記入ください。

１　どちらから参加されましたか。

福島県　茨城県　栃木県　群馬県　埼玉県　千葉県　東京都　神奈川県
その他（　　）

２　所属を教えてください。（〇を付けてください。複数回答可）

一般市民　学生（　中学生　高校生　大学生　）　企業
大学関係者　自治会関係　民間教育事業者　NPO
幼稚園，保育園関係者　学校教育関係者　社会教育行政関係者
その他（　　）

３　事例発表（１日目）

評価：当てはまる番号（４：大変良かった　３：よかった　２：あまり良くなかった　１：よくなかった）に〇を付けてください。

評価	感　想
４　３　２　１	

１日目のみ参加の方，裏面にも記載願います。　　ご参加・ご協力ありがとうございました。

４　分科会報告（２日目）

評価：当てはまる番号（４：大変良かった　３：よかった　２：あまり良くなかった　１：よくなかった）に〇を付けてください。

評　価	感　想
４　３　２　１	

５　基調講演（２日目）

評　価	感　想
４　３　２　１	

６　クロージング（２日目）

評　価	感　想
４　３　２　１	

７　本大会全般

評　価	感　想
４　３　２　１	

８　この大会参加をきっかけに，あなた自身にどんな変化がありましたか。

新たな気づきがあった　　ネットワークが広がった　　自分の活動に自信が持てた

特に変化はなかった　　その他（　　）

９　今後の具体的な活動について，どのようにお考えですか。

これから何か活動をしようとしている　　今までの活動を見直したい

特に具体的な活動は考えていない　　その他（　　）

（参考にした事例発表や具体的な活動等）

10　次年度の交流会に参加したいと思いますか。

参加したい　　参加したくない

11 その他お気づきの点がございましたら，ご意見ご感想等ご記入ください。

ご参加・ご協力ありがとうございました。

Design to Next

支え合う心と熱い想いで明日を創る

第5回 関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会

開催日　令和元年12月7日(土)・12月8日(日)

会　場　茨城県三の丸庁舎
(水戸生涯学習センター・茨城県立図書館)

参加費　無料

対象者　学びを通じた地域の課題解決に関心がある方
(誰でも参加できます!)

主　催　茨城県教育委員会, 茨城県生涯学習・社会教育研究会
主　管　関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会実行委員会
協　賛　NPO法人ひと・まちねっとわーく, NPO法人インパクト
(公財)茨城県教育財団, NPO法人日本スポーツ振興協会
(公財)日本教育公務員弘済会茨城支部
後　援　福島県教育委員会, 栃木県教育委員会, 群馬県教育委員会, 埼玉県教育委員会,
千葉県教育委員会, 神奈川県教育委員会, 国立青少年教育振興機構,
茨城県社会教育委員連絡協議会, 茨城県公民館連絡協議会
協　力　国立教育政策研究所, 茨城大学社会連携センター, 茨城県教育庁社会教育主事会

平成の30年間を終え,新しい令和の時代を迎えることになりました。

第5回大会は,「激動する日本社会にどう主体的に参画するのか」という思いを込めて「Design to Next」としました。次の日本,次の世代,次の生き方を考え,「新しいライフスタイルに挑戦する」という意思で,16の分科会発表を実現しました。

また,この転換期だからこそ,立ち止まって,私たちの基盤を確かめるべく,生涯学習・社会教育の歴史や現況を尚絅学院大学学長・日本生涯教育学会会長　合田隆史氏に語っていただくことにしました。自らの活動の原点や今後の方向を考えるにあたっての指針にしていただければ幸いです。

本年は,茨城県で国体が開催されました。したがって,本大会の開催が12月に変更することになりましたが,参加者の活動実践と熱い思いを結集して,幸せを願う国民の負託に応えられるような大会にできればと思います。

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会
実行委員長
茨城大学名誉教授　菊池 龍三郎

社会教育実践には,
その一つひとつに物語があります。

- あなたも,その物語に入り込んでみませんか
- あなたも,あなたの物語を考えてみませんか
- あなたとみんなの『幸せ物語』を創ってみませんか

DAY1 12月7日(土)

会場：茨城県三の丸庁舎

12:30 ～ 受付
13:00 ～ オープニング【大講座室】
13:45 ～ 16団体の事例発表　(会場は当日配布する資料をご参照ください)

13:45～14:30	A・E・I・M	14:40～15:25	B・F・J・N
15:35～16:20	C・G・K・O	16:30～17:15	D・H・L・P

DAY2 12月8日(日)

会場：茨城県立図書館視聴覚ホール

09:00 ～ 受付
09:20 ～ 分科会報告会
10:30 ～ 基調講演
〈登壇者〉 合田 隆史 氏 (尚絅(しょうけい)学院大学学長・日本生涯教育学会会長)

講師プロフィール

1978年 4月	文部省入省
2009年 7月	文化庁次長
2012年 1月	文部科学省生涯学習政策局長
2013年 6月	国立教育政策研究所フェロー
2014年 4月	尚絅学院大学学長
2018年12月	日本生涯教育学会第20期会長

11:50 ～ クロージング
〈登壇者〉 小沼 公道 氏 (茨城県水戸生涯学習センター所長)
佐藤 孝弘 氏 (茨城県立白浜少年自然の家所長)

16団体の事例発表内容

学校と地域の未来をデザインする

A	埼玉県	地域と連携・協働した教育の推進 ～「学校地域WIN-WINプロジェクト」「学校と地域の未来を創ろう!プロジェクト」の取組～	埼玉県教育局市町村支援部生涯学習推進課 地域教育幹　上松 寿明 氏
B	東京都	学校と地域のパートナーシップ体制の構築 ～複合施設を核とした学校・地域住民等の連携・協働の取組～	小平市学校支援コーディネーターネットワーク 会長　布 昭子 氏
C	千葉県	地域と学校をつなぐ「良い」加減(いいかげん)なコーディネートとは? ～ふくだ子どもの学び支援本部の実践～	野田市地域教育コーディネーター 野田市立福田中学校　川崎 貴志 氏
D	埼玉県	川口市における「地域学校協働活動」の推進	埼玉県川口市教育局生涯学習部 生涯学習課 社会教育主事 市川 重彦 氏

学びの施設の活動をデザインする

E	茨城県	学校・地域・行政の連携した取組 ～足利市学校図書館(小中高8校)のBefore・After～	学校図書館よくし隊 勝山 万里子 氏
F	千葉県	有秋散策地図　文化財マップをつくろう ～中高校生と公民館の連携の取組～	市原市立有秋公民館 社会教育指導員　松本 明子 氏
G	栃木県	とちぎ子どもの未来創造大学(6年目)の取組 ～大学・企業等との連携をとおして～	栃木県教育委員会事務局 生涯学習課生涯学習振興担当 社会教育主事　黒尾 貴英 氏
H	国立施設	セルフディスカバリーキャンプ2019 ～青少年教育施設を活用したネット依存対策推進事業～	国立赤城青少年交流の家 主任企画指導専門職　梁河 昌彦 氏

持続可能な地域をデザインする

I	茨城県	鉾田シティプロモーション事業 ～学校・首都圏大学生・市民・行政と連携したまちづくり～	鉾田第二高等学校総合学科 メディアマーケティング系列　第2年次
J	群馬県	みなかみ町社会教育委員の活動 ～生涯学習フェスティバルへの取組～	みなかみ町社会教育委員 副委員長　鈴木 春美 氏
K	神奈川県	これからの多世代連携, 持続性のある地域運営	横内子どもサポートネットワーク協議会 鈴木 奏到 氏
L	福島県	「地域のつながる基盤を活かした連携・協働による安全で安心できる地域づくり」 ～健康長寿・地域防災・子供の居場所～	福島市吉井田学習センター館長 矢吹 稔 氏

寄り添う心をデザインする

M	茨城県	被災地で大学生が現地の方々と 協力しながら試みる地域文化の復興	筑波大学「コトノハチーム」メンバーの 筑波大学生
N	福島県	「じっくり聞いてしっかりつなげる」家庭教育 ～家庭教育相談室「こころのアオシス」の取組～	西会津町家庭教育コーディネーター (兼)教育相談員 紫藤 真理子 氏
O	茨城県	外国人支援の取組について ～学校や地域等における多様な支援～	茨城NPOセンター・コモンズ 横田 能洋 氏
P	栃木県	地域課題解決型学習の展開 ～さくら市家庭教育支援チームの取組～	栃木県さくら市家庭教育支援チーム

第5回大会　関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会 【参加申込書】

ＦＡＸ：029－301－5339

Email：shogaku1@pref.ibaraki.lg.jp

[茨城県教育庁総務企画部生涯学習課振興担当 山崎] 宛て

FAX 送信

ふりがな			性　別
氏　　名			男　・　女
所　　属		役職	
連絡先	電　　話： 電子メール：		

大会の出欠等			
	※　下記１～４の各項目の希望する事項に必ず〇をつけてください。 ２-①は　Ａ　Ｅ　Ｉ　Ｍ　の中から１つ選ぶ。２-②～④も同様。		
第１日目　１２月７日(土)	1	参加　・　不参加	
	2 事例発表	① 13:45～14:30	A　E　I　M
		② 14:40～15:25	B　F　J　N
		③ 15:35～16:20	C　G　K　O
		④ 16:30～17:15	D　H　L　P
	3	情報交換会	参加　・　不参加 ※　情報交換会は，会費制です。【会費：3,000円】
第２日目　１２月８日(日)	4	参加　・　不参加	

☆JR水戸駅北口からの会場までの順序☆

JR水戸駅北口から国道50号を大工町方面へ向かい，「中央郵便局前交差点」を右折します。2つ目の信号「裁判所東交差点」右手が三の丸庁舎正面入口となります。（徒歩約15分）

≪申込締切≫　令和元年11月15日(金)

≪参加方法≫　参加申込書をメール・FAXで送付してください

≪申込み・問合せ先≫

茨城県教育庁総務企画部生涯学習課振興担当 山崎

TEL:029-301-5318　〒310-8588 水戸市笠原町978番6

≪会場≫　茨城県三の丸庁舎　〒310-0011水戸市三の丸1-5-38

【水戸生涯学習センター講座室，共用会議室，茨城県立図書館】

最新情報はFacebookページをチェック→

※当日はできるだけ公共交通機関をご利用ください。
※日程や会場，発表テーマ，発表者等については，変更になる場合があります。
※個人情報は，本大会に関すること以外の目的では使用いたしません。
※当日の様子（写真，動画，アンケート内容等）につきましては，ホームページ（SNSを含む）や報告書等で使用することをご了承ください。
※チラシ等のブース出店を希望する団体については，個別にご連絡ください。
※宿泊については，個人でご対応ください。

第5回大会関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会　役員・実行委員等名簿

No	役職等		氏　名	組織・職名	担当部会	備考
1	委員長		菊池龍三郎	茨城県生涯学習・社会教育研究会　顧問（茨城大学名誉教授）	—	
2	副委員長		長谷川幸介	茨城県生涯学習・社会教育研究会　会長	広報部長	
3			池田　　馨	茨城県生涯学習・社会教育研究会　副会長	運営部長	
4			田口　克弥	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 参事兼課長	会場部長	
5	委員	学識経験者	西野　由希子	茨城大学社会連携センター長	運営部	
6			松橋　義樹	常磐大学人間科学部教育学科　助教	運営部	
7			伊藤　真木子	青山学院大学コミュニティ人間科学部　准教授	運営部	
8			坂井　知志	国士舘大学　スポーツアドミニストレーター	運営部	
9			中島美那子	茨城キリスト教大学文学部児童教育学科　教授	広報部	
10		社会教育関係	儘田　茂樹	茨城県社会教育委員連絡協議会　会長	広報部	
11			冨山かなえ	筑波総合研究所調査研究部　研究員	広報部	
12			横山　典男	茨城県生涯学習・社会教育研究会事務局次長	運営部	
13			栗田　将夫	NPO法人　ひと・まちねっとわーく事務局次長	運営部	
14			志摩　邦雄	NPO法人　インパクト 県北生涯学習センター長	運営部	
15			法堂　泰明	NPO法人　日本スポーツ振興協会 県西生涯学習センター次長	広報部	
16			小沼　公道	水戸生涯学習センター所長	運営部	
17		関東近県関係	渡邉　康一	福島県教育庁県南教育事務所総務社会教育課主任社会教育主事兼指導主事	広報部	
18			藤井　隆光	埼玉県教育局生涯学習推進課 社会教育主事	広報部	
19			知久　鉄平	群馬県教育委員会生涯学習課 社会教育主事	広報部	
20			瀧澤　和人	神奈川県教育委員会教育局生涯学習部生涯学習課 社会教育主事	広報部	
21		県関係	松﨑　英政	茨城県水戸教育事務所 主任社会教育主事	運営部	
22			萩谷　佳之	茨城県県北教育事務所 主任社会教育主事	広報部	
23			成田　悦子	茨城県鹿行教育事務所 主任社会教育主事	運営部	
24			若山　隆男	茨城県県南教育事務所 主任社会教育主事	会場部	
25			古川　宏幸	茨城県県西教育事務所 主任社会教育主事	広報部	
26			佐藤　竜也	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事	会場部	
27			松本　京子	茨城県県北生涯学習センター 事業グループリーダー	広報部	
28			内野　　武	茨城県鹿行生涯学習センター 生涯学習課長	運営部	
29			勝田　　篤	茨城県県南生涯学習センター 事業課長	会場部	
30			行本　佳織	茨城県県西生涯学習センター　事業担当	広報部	
31			木村　忠夫	茨城県立中央青年の家 主任社会教育主事	会場部	
32			佐藤　孝弘	茨城県立白浜少年自然の家 所長	運営部	
33			小川　裕貴	茨城県立さしま少年自然の家 社会教育主事	会場部	
34			大高　靖行	茨城県立図書館　社会教育主事	会場部	
35		市町村関係	新木　圭彦	阿見町教育委員会 社会教育主事	会場部	
36			小林　　博	茨城町教育委員会 社会教育主事	運営部	
37			鴨志田　誠	日立市教育委員会 社会教育主事	広報部	
38			太田　雄介	鹿嶋市教育委員会 社会教育主事	運営部	
39			鈴木　忠雄	坂東市教育委員会 社会教育主事	広報部	
40	アドバイザー		國府田　大	国立教育政策研究所　社会教育実践研究センター・専門調査員	—	
監事			飯村　雅明	株式会社茨城新聞社 筑西支社長	—	
監事			飯塚　佳子	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 副参事兼総括課長補佐	—	
＜事務局＞						
事務局長			平山　健治	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 振興担当課長補佐	—	
事務局次長			和田　秀彦	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 学習支援担当課長補佐	—	
事務局			山﨑　英男	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 振興担当主任社会教育主事	—	
事務局			田宮奈津美	茨城県教育庁総務企画部生涯学習課 管理担当主事	—	
事務局			大月　光司	茨城県生涯学習・社会教育研究会　事務局長	—	

歴代大会テーマ，事例発表カテゴリー一覧

会場：茨城大学	第　1　回　大　会
大会テーマ	県域を越えて「学びによる地域づくり」の輪を広げよう！
事例発表 カテゴリー	（会場A）学校・家庭・地域の連携 （会場B）指導者養成・研修 （会場C）地域課題の解決に向けた取組 （会場D）ボランティア関係 （会場E）青少年教育

会場：茨城大学	第　2　回　大　会
大会テーマ	今こそ社会教育の底力を！
事例発表 カテゴリー	（会場A）学校・家庭・地域の連携 （会場B）家庭教育支援 （会場C）地域課題の解決に向けた取組① （会場D）地域課題の解決に向けた取組② （会場E）青少年教育

会場：茨城大学	第　3　回　大　会
大会テーマ	社会教育の大きな波を起こそう！
事例発表 カテゴリー	（会場A）学校・家庭・地域の連携① （会場B）学校・家庭・地域の連携② （会場C）地域課題の解決に向けた取組① （会場D）地域課題の解決に向けた取組② （会場E）青少年教育

会場：茨城大学	第　4　回　大　会
大会テーマ	**LINK　to　Action!**　～自分らしい未来のための現場報告～
事例発表 カテゴリー	（会場A）公民館・施設と地域づくり 「子どもと大人が元気になる協力体制のつくり方」 （会場B）市民の手による活動 「やりたいことを自分から実現する活動」 （会場C）地域活動と学校 「学校と子どもたちが主役の地域活動」 （会場D）環境・国際に関する活動 「環境保護・多文化共生で住民が居心地よくなる活動」 （会場E）大学・図書館・企業との連携 「大学・図書館・企業が地域と共に成長する活動」

会場：三の丸庁舎	第　5　回　大　会
大会テーマ	Design to Next　支え合う心と熱い想いで明日を創る
事例発表 カテゴリー	○　学校と地域の未来をデザインする ○　学びの施設の活動をデザインする ○　持続可能な地域をデザインする ○　寄り添う心をデザインする

facebook でつながろう！

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会のページは
QR コードからどうぞ！

関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会
第５回大会　実行委員会

＜事務局＞　茨城県教育庁総務企画部生涯学習課振興担当
〒310-8588　茨城県水戸市笠原町 978 番６
E-mail　shogaku1@pref.ibaraki.lg.jp
TEL　029-301-5318　　FAX　029-301-5339